

僕だけは汗が出るほど暖いのだ。

「此方へ向けて下さいよ。自分ばかり暖くして、酷いわ。」

「そりや仕様がないうさ、俺が考案者だもの。」

「ア、詰らない。妾最う出るわ。」

「出たッて好いよ、御勝手次第だ。」

妻の進退如何にと見てあれば、なか／＼出さうにはない。出ると威嚇して向けさせやうとする策略なのだ。そんな甘茶に乗るものか、いよく名案の価値にありだ。

「やう、向けて下さいよ。」

「八釜しくいふな、五月蠅い奴だな。考案者の慈悲を待つて居ろ。」

「妾最う出てよ。」

決然として妻は蒲團の外へ膝を出した。妊娠によつて常よりも稍や神経過敏になつて居るからか。面の膨れ方が稍や迅速だ。

「ぢや向けてやるよ。サア、向けてやる。」

「いりませんよ。」

やアいよく膨れた。ソーツと顔を覗くと、目を潤まして居る。ヒステリーの徴候だわい。

「オイ、怒ったのかい、向けてやるといッたら這入れよ。」
まだ黙ッて居る。

「オイ、這入らないのか。這入ッてくれ、さあ向けてやるから……オイ。」

「だッて、良人は窘めてばかり居るんですもの。」

「窘めアしないよ。お前がヤイ／＼いふからだ。さア蒲團を少し持ち上げる。」

一方口の密柑箱を、グルリと廻さうとすると、釘があるから疊へひツか／＼と見えて、バリ／＼と摩れる、隣家の竹公が目を剥くと思つたから、少し持ち上げるやうにしたら、如何したはづみか當り鉢の椽が向ふ脛へ觸ッた。

「あつ／＼／＼。」

「如何したんですよ。」

「當り鉢の椽が出ツ張ツて居るから、酷び目にあつた。」

「それ御覽なさい、罰よ。」

「お前のお蔭で飛ンでもない目にあつた。ア、熱いく。」

罪な密柑箱だ。二方に直したいが、面倒臭いからそのままにして、毎日斯うして夫婦で引ツ張りツこしてあつた。安火を抱へて柱に靠れて、古雜誌でも讀んで居れば、錢のないのも苦にならぬ、たゞ一ツ困るのは、人が來た時ちよつと工合が悪い。何日も牛込のお婆さんのことをいふやうだが、お年始に來て「妾しや安火へ這入らせて貰をうよ、」といはれたには參つた。頗る狼狽して蒲團をかけたまゝ三疊へ隠したのを、情ないかな所望と來た。

「安火ですか、安火は火がないでせうよ。オイ、火鉢へウンと炭をつけ。」

「イエ、火鉢より安火が、腰が温ツて宜しい。年を取ると、安火が何よりも御馳走だ。」

困ツた婆さんだ。泣きたくなつて來た。妻もモチくして居る。

「ぢや一寸待ツて下さい。今火を入れますから。」

火を入れるにしても、當り鉢を持つて來る譯に行かないから、火鉢を持つて行つて體軀で陰にして入れた。

「其所へ持つて行きませうか。」

「イ、エ、其所で當らして貰ひませう。最う何にも御馳走は要りませんから、一寸暖まらして貰つて、妾は直ぐお暇にしやうよ。」

御馳走は望まれても出來ないが、安火へ這入られるのも遣りきれない。

「餘り側へ寄らないで、背後の箆筒へ凭れて、手を上へ乗せて置くと暖くなりますよ。」

「さうかね、ヤレく、これは有難い、自家に居ても、朝から晩まで安火と首ツ引きですからねエ。」

「さうでせうとも、お寒いんですもの、ねエ。」

妻は一人で火鉢に嘸り付いて、我れ關係せず焉といつたやうな態度をして居る。いづれバレたら僕の爲にしてしまふだらう、困ツた奴だ。

「オイ、お前も安火へ這入れよ。」

「エ、。」

エ、とはいってもなか／＼来ない。僕はお婆さんの側に居て、種々なことを聞かれるのが嫌やだから、或るべく側に居たくないのだが、何だか氣にかゝって仕様がなから、暖かくもないのに向き合ッて這入ッた。

「まだ暖くないでせう。」

「さうでもない、オヤ、此安火には蓋がないのだねエ、コリヤ危ない。」

サア困ッた、手探りに撫で廻して居るらしい。餘計なことをして貰ひたくない。覗かんでもしたら種がバレてしまふ。

「大丈夫です、起きてる時だけするんですからー、餘り、側へ寄らないやうにして下さい。」

「あつ、オ、熱つ、火鉢が出ッ張ッとするもんどやで、オ、熱つ。」

やりやがッた。いふ口の下からとう／＼やりやがッた。プツと噴き出したさうに

なツたが、笑はれもしない、大方手探りに撫で廻して居て、當り鉢の椽へ觸ッたのだらう。だから言はン事ではない、僕は心持自分の方へ引ッ張ッた。

「危いですよ。」

「何だか火鉢が出て居るやうだねエ。」

ワア助けてくれ。蒲團を持ち上げて覗き出した。

「大丈夫、大丈夫です、少し離れて居ると、好い工合に暖くなるんですよ。」と、必死になつて遮うとしたが、お婆さんは昵と覗いて、

「オヤ／＼、これぢや如何も。」と、悪い物でも見たやうにいふ。いよく正體を見たらしい。稍や笑ひたさうな顔だ。

「間に合せに、僕の手製ですよ、これでも結構あたツて居られるんですぜ。」

「さうですともね、コリヤ好い趣向ぢや、ホ、、、。」と來た。斯うなりや貧乏の金看板をかけるより仕方がない。ア、詰らない、餘計な苦勞をさせられた。人間は矢ッ張り、偽りなく飾りなく活きるのが一番安心で、一番強味があるらしい。

(三)

妻の腹は日増しに膨れ出して、見馴れて居る爲か左程にも思はなかつたが、如何かすると非常に目立ッて見える。偉いことにしてしまつたぞ、月が代ツたら五月になつたのださうだ。

「うかくしては居られない。責任が息苦しいほど僕の双肩にかゝッて来る。以前學校生活を止めて、始めて世の中へ出た時、急ふに年を取つたやうな味氣ない、心細い思ひをしたが、今度は又急に爺になつたやうな氣が仕出した。仕方がない、貧弱ながら僕も世間並の親父にならなければならぬ。人間の一生が斯ういふ順序で、子供から成年に成年から中年に、中年から老年に移ッて行くのなら、實に詰らないものだ。まだく、と前途を遼遠に思ッて居る内に、何日の間にか僕も爺になりかけて來たのだ。暗い人生といふ深いトンネルの奥底が、ほど知れたやうな氣がする。

最う焦慮ッても仕様がな、妻と子供を伴侶に、荒茅たる人生の行路を徘徊はなけ

ればならぬ。何所に宿るべき期望の燈灯が見えるだらう。

噫、俺の哀れなる伴侶よ！

僕はどんな危険を冒しても、僕の哀れな伴侶のたみに、危ない瀬踏みをしなければならぬ。

「オイ、氣分が悪くないか。」

「イ、エ、」

「出来るだけ攝生して、無理をしないやうにしてくれ。便通はあるかい。」

「エ、思ふやうにありませんの。」

「それや不可ン、薬はなるべく服まない方が好いさうだが、菜葉でも食べて見たら如何だ。」

「イ、エ、お芋が好いのよ。」

「はゝゝゝ、我出引水ぢやないか、まア好い、焼芋でも買ッて來て食べろ、お易い御用ぢやないか。」

「良人も食べたいの。」

「俺ア好いさ。お前の身體のためにさへなりや好い。」

妻が矢鱈に可哀想でならぬ。こんな意氣地のない僕を、唯一の力にして居るのだと思ふと不慙で堪らぬ。何だか騙して居るやうで頗る心苦しい、出来得るかぎり奮闘して、期待を満たしてやらなければならぬ。

「お前、これからは俺が水を汲んでやるから汲まない方が好いぜ。」

妻が勝手へ立つと、僕も出て行ッて助手を勤める。然るに、

「まだ大丈夫よ。」と、御當人は平氣で、寧ろ一笑に附し去らんとする顔だ。

「イヤ、若し躓いて、仆れでもしたら大變だから、俺が汲んでやる。」

洋桶を提げて井戸端へ出て行くと、さも妻ノロジで御座ると廣告するやうで、稍やきまりが悪いが、秤へ掛けて見ると矢張り妻の方が可哀想だから、外聞もかまわず水汲をやる。

ヤッて見ると妻の役も容易ぢやない。この寒いのに米を研いで、飯を炊いて洗物を

したりお副食拵へをやるのはなかく骨だ。世の中には嬢アくと廢物のやうにいつてる奴があるが、勿體至極もない、嬢ア様に對して相濟まぬことだと思ふ。稀には水一杯も汲んでやるべきだ。

斯ういふと、僕を以ッて妻ノロの甘藏と思ふか知らんが、そこは緩嚴交々至るといふ筆法で、第一お姿さんから聞いた産前の心得の三ヶ條は、八釜しく實行させる。

ふん反りかへッて寝ると、要捨なくへし曲ける。永寢をすると毆き起す。お湯へ行く時には必ず時間の制限をする。

その内、いよく帯をしなくちやならぬといふ問題が持ち上ッて來た。普通の帯は毎日締めて居るが、つまり妊娠の鑑札を付ける譯になるのだ。妻の話によると、最う腹の兒がすっかり人間の形になッて居るのださうだ。どんな顔をして居るか、ちよつと見たいやうな氣がする。

「お前さうして居て、腹の中に居るのが解るかい。」と、訊いて見た。

「さうですねエ、解るやうな氣もしますわ。」

『ドレーレ。』

何だか腹の上からでも子供の動靜が撫でゝ見たい。初めて僕は親子の情を力強く感じた。

『冷たい、嫌やですよ。』

妻は顫ひ上るやうにいって僕の手を拂ひ退けた。子供に對する権利は、女親一人の掌中にあるやうだ。蜂の生活状態が尤も痛切にそれを表現して居る。

『それよか良人、如何しませうねエ、お隣のお産婆さんへかゝりますか。』

『どうでも可いさ。お前の好いやうにするが好い。然し餘り上手ぢやないといふぢやないか。』

『エ、上手ぢやなささうですけど、隣でいふから。』

『いッたッて好いさ。強いて、拙手だと思ひながら掛る必要はない。』

『妾、能く聞いて見ますわ。植木室でも彼所へ掛ッたのですから。』

『ぢや然うするが好い。』

妻はすぐ隣りへ相談に行ッた。いよ／＼本統に大變なことになッたのだ。大いに努力しなきやならぬ。お蔭で先生の方も都合よく運ぶし、大華堂の講談物を十冊書く約束が出来たから、苦しいながら兵糧には差支ない。それが何より有難い。

『矢張り良人、妾お隣りでかゝッたお産婆さんにしますわ。親切ださうですから。』

『ぢや然うするさ。今日行くのかい。』

『エ、頼むだけ頼んで置けば、明日が戌の日ですから大方明日来てくれるでせう。』
『又かつぐのか。婦人病者の心得に迷信だと書いてあッたぜ。』

『好いちやありませんか、何日も定ッた日はないのですから、他人の好いといふことはするものですわ。』

御無理御尤、何も彼も妻の言を容れて、僕も大いに擔ぐことにした、明日の手廻しに、大枚一圓産婆さんのお禮として包んで置いた。妻は栖木綿を買ッて来て、すぐ産婆さんへ行ッた。

翌日午前中に、待ち心で居ると、案の如く産婆さんが来た。小さい革靴を提げた、

色の黒い、中婆さんが来たから、妙な奴が来たぞと思つて居ると、それが産婆さんだ。何だか僕等夫婦の秘密を、根底から攫む権利を持った人のやうで、聊かバツが悪い。

お茶を飲みながら暫らく話をして居る内に、双方幾等を親みが出来た。最初思つた程妙な奴でもない。

「それでは、ちよつと拜見しましやう。」

暫らくして産婆さんが言つた。サア偉いことになつた、と僕は思つた。妻は稍や不安の顔を赧らめて、三疊へ行つた。マゴくしながら買つて置いた洒木綿を出したり剪つたりする。産婆さんも三疊へ行つた。サアいよく三疊で拜見されることになつたのだ。どんな風に拜見するか、あんまり無茶な拜見をせられちや困る。

僕はまづ先刻から食ひたかつたお茶菓子を頼張つて、お茶をグツと飲んだが、如何も落着いて居られない。昵と見て居ちや妻に相済まぬやうな氣がするから、立つて見たが何もすることがない。用あり氣に表へ出たが行く所はない。逃げられるものなら

此まゝ逃げたいが、逃けても居られないから又家へ這入つた。なるべく見ないやうに火鉢に獅咬み付いて、灰を均して居ても、ともしては視線が行く、産婆さんは妻の腹を揉んで居る。格別無茶な拜見もして居ないやうである。先づ安心だ。

暫らくしてやつと拜見が済んだ。洒木布を廣く腹へ巻いて貰つて、妻は帯を締め直しながら。

「良人、濟ませんがちよつと水を……。」と、命令する。

「水？、如何するんだい。」

僕は兎に角勝手へ行つた。水といはれても洋桶に穴が明いてるから一滴もないことは知れて居る、急いで一杯汲んで来た。産婆さんは水口へ覗いて待つて居たが、僕が汲んで来ると「濟みません」といひながら勝手に洗面器へ入れて手を洗つた。産婆さんといふものは割合に家庭的で、氣が置けなくツて好い。醫者と髮結さんの混血兒のやうなものだ。

妻は茶を入れ更へた。産婆さんはいろいろ、妊娠中の注意をしてくれる。妻も最う馴

れたかして、先刻拜見されたことは忘れてしまったやうに、知らないことをいろく承はった、ものゝ小一時間もして、やうやくお暇を——といひ出したから、一圓札の包んだのを出すと、頭を屈めてちよつと頂いて帯の間へ入れた。これで此方の義務も済んで、妻には妊婦といふ稱號が付いたのだ。

『オイ、如何だツたい。』

産婆さんが歸るのが待ち遠しかつたやうに僕は訊いた。

『どうでもありませんわ。』

妻は案外平氣で居る。

『何所をどういふ風に診たんだい。』

『やッばしお腹を診たばツかしよ。』

『本統か、俺アドンなことをするかと思ツて、氣が氣ぢやなかつた。まア芽出度い。』

最うお晝飯だから祝盃を舉げやうぢやないか。』

『さうねエ、何家でもお祝ひをするんですツてねエ。』

『さうさ、芽出度いんだもの、大いにやらう。赤の飯を炊いてくれ、俺ア新川屋で酒を取ツて、赤豆と魚を買ツて來てやる。』

『お魚だけ?』

『何かまだ拵へるのか。』

『お魚だけでは仕様がありませんわ。甘煮でも拵へなきや。』

『ぢや拵へるさ、材料は?』

『さうねエ、里芋と人參と蓮位で好いでせう。』

『よし、買ツて來てやる。』

産婆さんにかゝツて、妊婦の洗禮が済んだ爲か、すツかり安心して、妙に芽出度なツてしまった。二合の空罐と妻の墓口を持つて、すぐ通りですツかり買ひ調へて來た。魚は妻の注意に隨ツて、庖丁を入れない秋刀が一本だ。

『オイ、米を研いだか、よし來た、水は俺が汲む。』

景氣は好い、構ふもんか、尻端折りで水を汲んで來た。ちツとお粗末だがこれでも

爺になるんだ。

「お釜の下を焚き付けやうか。」

「さうねエ、では一寸赤豆を洗ひますから、焚き付けて下さいな。お釜で赤豆を煮て、煮えた所でお米を入れれば好いでせう。」

「好いともく。」

木端を二三本抛り込んで、燃し付けたが巧く薪が燃えてくれない。バアと木端だけ燃えて煙が濛々と立ち昇る。エヘンく、咽喉がエ辛ッほくなつて来た。

「良人、そんなことをしちや駄目よ。」

「巧く燃ゑないんだよ。」

「木端をもつと、澤山入れて、ドンく燃して置いて薪を入れるんですよ。」

「なるほど、よし。」

火を燃すのでさへ容易ではない、この鹽梅ぢや放火も出来ないわい。出来なくって幸福だ。木端を矢鱈に押し込んで、改めて火を付けると、景氣よく燃ゑ出した。

「如何だい、こんなもんだ。」

「燃し付いて？では、里芋の皮を剥いで下さいよ。」

オヤく、そろく頭に乘つて、亭主をこき使ふ了簡だな。これだから女は養ひ難い、と思つたが、妻は姉婦だから一籌を輪せざるを得ない。

「ア、出せ。」

「黒くなつた所は取つて下さいよ。」

「ウム。」

ズルくして頗る持ち悪い。餘計なことをいひ出して、飛んだ目に逢ふもんだ。手が冷たくツて仕様がなないが、冷たいのはお互ひ様だから文句もいへない。

「最う、オキが出来たでせう。」

「ア、出来たよ。」

「これを、茹るんですから焔爐へ取つて、炭をついで下さいな。」
ヨ一矢番早の命令だ。仕方がない。

『ヨシく。』

忙しいことだ。薪を燃して里芋の皮を剥いで、焜爐の下を煽がなきやならない。女房の腹を膨らますと、三面六腎の化物にならなきや亭主の役が勤まりさうもない。

然し、忙しい思ひをしたゞけに、赤い飯が出来て甘煮が出来て、お頭附の秋刀魚が食卓に上った。お負けに絶へて顔を見ないお銚子まで出た。芽出度いこと夥しい。

『サア、今日はお前からお頭附に箸を下せ、後は俺が頂戴する。』

『ホ、、、嫌やよ。頂戴するなんて、後も先きもないぢやありませんか。』

『ところが然うぢやない。今日はお前の祝だ。なア、貧乏で餘裕がないから、鯛の焼物とまではゆかないが、これが今の我々の身分に相等したお祝だ。無い錢で無理な御馳走をするよりも、却ッて腹の兒に好い感化を與へる。サア食べろ。』

『何だか勿體ないやうですわ。』

『何故、可笑しな奴だな、早く食べろよ、お箸下しさへ濟めア、一瀉千里で俺も出掛けるぜ、ア、久し振りに酒を呑むと、俺でも酒の味が解るやうな氣がする。』

一合の酒を半分ばかり呑むと、クワと顔が頬照ッて、大それた、天下を呑むの概が崩した。佳い氣持だ。

『襦袢は如何しませうねエ、最う今月から準備して置かなきやなりませんわ。』

妻には妻の心配があると見える、但し襦袢の心配とは僕の想像も付かぬことだった。

『何か縫襷があるだらう、俺の寢衣をひッ裂いても好いよ。』

『寢衣は良人、無くツちや困るぢやありませんか。』

『好いさ、何でもある物を利用するさ。俺ア襦袢一枚で眠るから構はない。』

『それから、赤ん坊を寢かせる蒲團が要りますねへ。綿は打ち返へしたのがありますから皮だけでも少し買ッて下さいな。』

『今かい。』

『イ、エ、直ぐでなくツても好いんですけれど、なるべく早い方が好いわ、衣物も二三枚拵へて置かなきやなりませんし。』

偉い注文を澤山押し付けて來た。これりや逆も堪りかねる、といッて、蒲團も着物

も襦袢もなくツちや仕様がな。いよく貧乏世帯が落城に瀕する。

(三)

産婆にかゝつて安心はしたが、物要が大變だ。原稿料を取つて来ても、鉋屑に火が付いたやうに、瞬く間にバアとなくなる。然かも産婆さんが毎月一度来るといふのだからやれきれない。来てくれるのは誠に結構だが、その度に五十錢づゝ包んで出さなきやならぬのださうだ。それも日が定つて居れば好いが、芥屋と一緒に唐突だから困った。いくら鐵面皮でも、今日は都合が悪いから、明日にして下さいとは言へない。借金取りよりまだ始末が悪い。

といつて、毎日見張りに出て居て、都合が悪い日に来たら「ソラ逃けろ、ソラ隠れろ」と妻を押し入へ隠すとか、例によつて三十六計をきめこむ譯にも行かぬ、そんなことをして居ては、第一仕事が出来ない、妻は如何してもお産婆さんのお金は別にして置いて下さいと、耳が痛くなるほどいふが、さて思ふやうにはならぬ、なくなり勝て

ある。

そんな時には氣が揉めること氣が揉めること、今日は来るか、明日来るか——と日和都合でも想像するやうに、氣にかゝること夥しい。斯ういふのを火宅の宿といふのか知らんが、まるで針の席へ座つて居るやうな鹽梅だ、蹺音がするとソラ来た!と思ふ、人聲がすると産婆さんかな——と耳を傾ける。けれど、その甲斐もなく、盗人猫のやうに、ノツソリ蹺音もなく、丁度間の悪い日にやつて来たには魂消た。ならう事なら消えてなくなりたいほどである。

困った。如何しやうかと途方に暮れてしまつた。口の先では御苦勞様で……といつても、腹の中では迷惑當惑困惑の至りだ。妻のお産の心配よりも、五十錢を産み出す方が餘ッ程難産だ。家でも廣いと席を外して、妻と氣脈を通じて互ひに肝膽を碎くことも出来るが、家の中が見え透いた只つた二間きりだから、相談することが出来ない。といつて、困つたと思つて居るばかりでは、何所からも湧いて来ない。幸ひ妻が勝手へ茶を入れ替へに立つたから、外の用でもあるやうに、すぐ後から跟いて行つて、

「オイ、如何しよう」と、小さい、消えかゝった蠟燭のやうな聲で相談をもちかけたけれど妻は、産婆さんに聞えると危ぶんだものか、茶壺を貸して下さいと大きな聲で僕の相談を打ち消すやうにいふ。茶壺どころの騒ぎかい。そんなお手傳に來たのぢやないと思つたが、仕方なく茶壺を取つて、

「オイ、如何しよう。」と、又相談をかけた。僅か一間半ほどしか距離がない座敷で、産婆さんが耳を立てゝ居るやうな氣がする。

「だから、妾が言つたぢやありませんか。」と、妻は額ひで睨んで、羽織の襟を掴んで「あちらの此品で……。」と、目に物を言はせる。

羽織を持つて美濃屋に行つて、入質て來てくれといふ意味は充分受取れた。外へ出る時着る妻の羽織が、たった一枚あるんだ。美濃屋とは極く懇意で、氣に向けば用はなくつても遊びに行く位で、質屋の使ひはお耻かしながら由來僕が一手に引受けて居るのだが、今日に限つて何故か嫌やだ。第一亭主たるの估券が全然踏み躪られるやうな氣がする。

「亭主が質使をするやうで、如何なるものか」と、自分を責めるやうな口調で、實は妻に苦情が言ひたかつたが、まさか産婆さんの目の前でいふことは出来ない。エ、俺ア最う知らない——と、捨て鉢にもなつても見たが、妻に責任を打ちかけて置いて、逃げ出すほど無責任にも不人情にもなれない。

所詮は行つて來る外はない。然し行くとしても、産婆さんが座り込んで居るから、持ち出すのに頗る工合が悪い、つまりそれが嫌やになつた第一の原因である。

「困つた。嫌やになつちまう。」と、此時ばかりは流石の僕も泌々貧乏を呪ひたくなつた。最少して涙が出さうである。鼻の中がツーンとした。

然し窮すれば通ずとかで、やうやく不意に、好い考へを思ひ付いた。みだりに見得を張る譯ではないが、子供でも拵へやうといふ者が、斯うした場合五十錢の錢もないといへた義理ぢやない。

「オイ、俺ア郵便局へ行つて來るから、羽織を出してくれ。」と、僕は擦つたいやうな心持で、笑ひたくなつたのを無理に抑へながら、押入を開けて郷里から來た小包の油

紙を引き出した。

「へー。」

妻は産婆さんと話をして居たが、面喰ったやうな不可解な顔をして居る。

「早く送ッてやらなきや不可ないよ、間に合はないよ。」

「さう、さうですねエ。」

妻もやうやく謎を解いたらしい。稍や笑を啣みながら羽織を出したが。いかな産婆さんも、まさか小包にして質屋へ持ッて行くとは氣がつくまい。眞面目くさった顔をして見て居る。結句斯うなると面白い、何事でも苦心の後は軽快な快味が起るものだ。

「包みませうか。」

「イヤ好い。」

妻の手を煩はすまでもないことだ。持ッて出る時だけ小包らしい體裁に見えれば好い。新聞紙でくるんだ上を手早く油紙で包んで、縦横十文字に麻繩をかけた。

少ムグサくだが小包に見える。

「オイ、筆を持ッて来い。」

油紙の上へ、これも手早く牛込の家へ宛てた町名と名前を書いた。妻はそれを見ながら笑ひたさうな眞面目な顔をして居る。好い考へだと感心したやうにも見える。餘ッ程感心して貰はなきや引合はない、僕でなくツちや、迎も斯うした場合こんない智慧が出る筈がない。我ながら滑稽でもあり可笑くもある。

「さア出来た。はムムム。」

「早く行ッて来て下さい。」

「ウム。」

麻繩を指にひツかけて、二三度振ッて見た。どこまでも小包の積りだから、これも一ツの照隠しだが縛り方が緩いから外れさうである、ほい失敗ッた、外れたら又やり變へなきやならぬ。餘計な手数だ。

「ちつと緩いやうでございますねエ、大丈夫でございますか。」

産婆さんは本統の小包だと思つて氣を揉んで下さる。こゝまで眞に迫れば最う大丈夫だ。

『ナニ、市内小包ですから好んです。』

『市内でも、よく間違がございますよ。宅でつい先達て赤阪へ仕立物を送りましたら三反の中一反抜けて居ましてねエ、酷ひ目に逢ひました。』

『あら、そりや大變でございましたねエ、宅ではあの通り性急でございますから、なんでも爲ることが粗雑で……。』

妻も眞に迫つたやうな顔をして居る。質屋へ行くのだとは夢にも知らんといふやうな顔だ。人間の表裏といふ奴は、斯うも違ふものかと惘れざるを得ない。こゝらが人間の人間たる所だらう。満更犬や猫では出来ない藝當だ。

表へ出ると人知れず笑が湧き上つて来て、我ながら笑はずには居られなかつた。自分で自分のすることが可笑しくつて堪らない。喜劇でもやつてるやうな氣分だ。態と見せびらかすやうに、ブラ／＼振りながら美濃屋へ行つて、豫定通り借りた。

幾等でも餘裕が出来ると、すつかり暢氣になるのが僕の特質で、胸中一點の曇もなく、ゆつたりと佳ひ氣持になつた。餘計なことだと思ひながら、煎餅で濟む茶菓子を大枚二十錢奮發して餅菓子にした。

經木包を持つて歸つて來ると産婆さんは小包にかこつけて菓子を買いに行つたのだと思つたかも知れない、非常に恐縮したやうにいつたから、歸りに十ばかりの残りをついでやつたら、續けて二度頭を下けた。これで此方も立派なお産家だ。

『幾等借しました?。』

産婆が歸ると、妻はヤレ／＼といふやうな顔をした。

『二兩さ。』

『妾、如何しやうかと思つて、心配しましたよ。』

『お前より俺は如何する。一時は途方に暮れて、逃げ出したかつた。』

『だからこれからは、如何してもお産婆さんのだけは別にして置かなきゃいけませんわ。良人が構はない／＼つて、退けて置かせないんですもの。』

「無きや仕方がないさ。少し馬力をかけて、これからは残して置くやうにしなさいよ。よく産れたら大變だなア。」

「さうですとも。なんの彼のつて、随分要るものですからねエ、今の内残つてるお金で、着物でも一二枚拵へて置きませうか。」

「さうだなア、どんな物で拵へるのだい。」

「妾、洒木綿か何かで、すつかり白にしたいと思ひますの。」

「馬鹿、死んだ者ぢやあるまいし。」

「あら、あんなことを仰有るわ、何處でも、好い家ではみんな白ですつて大學なんかでも、入院してお産をすると、白を着せるんですわ。安くつて、さつぱりして居て好いちやありませんか。」

さつぱりはして居なくつても、安價ひのは大賛成だ。好い家の眞似が安くつて出来れば、此上もない仕合で、大いに好い家の向ふを張るべしである。

「ぢや然うするさ。」

「敷蒲團も、妾白で拵へたいと思ひますの、洒木綿で好いちやありませんか、ねエ。」

「好からう、掛蒲團も洒木綿でしやう。」

「まさか、掛蒲團は妾、妾の長襦袢で拵へますから、洒木綿を一反買つて下さいませんか。」

「洒木綿はあるだらう、帯をした時買つたぢやないか。」

「ありませんわ、良人の肌襦袢とお禪を二ツとりましなから、些ともありませんわ。」

「お禪は二ツも三ツも要ないよ。一ツありや澤山だ、汚れたら又お湯屋で洗濯つてくる。着物にでも蒲團の足にでもしてやれ。」

「だつて……。」

「好いよ。餘計な物は決して不要ない。」

「でも、どうせ一反買はなきや足りませんもの。」

「足りなきや仕様がなさい。無くならない内に早く買つて置け。」

妻は洒木綿を買つて来て、ポツ／＼お産の準備に取りかゝつた。日に日に目立つて

腹がセリ出して来る。あの大きな尻が萎びて、腹の方へ廻つたやうである。見て居ても腰の折れ屈みが不自由さうで、手でも曳いてやらなきや滅多に外へは出されないやうだ。

上野に桜花が咲いた、池ノ端の博覽會へ人が出るといふことだが、家では腹ほてで大騒ぎだ。桜花も博覽會も新聞で見ると、まるつきり外國の出來事のやうで、行かれもしなきや見たくもない。

隣家ではお爺さんが幾等か快いさうで、ゼー／＼いひながら庭へ出て、時には古杭を薪にしたりなどするやうになつた。暖くなつて大きに快いのださうだ。息子は相變らず役所へ出て、地主の御隠居の機嫌を取つて、ちよい／＼お座敷だといつて夜る出掛けて居るやうだつたが、去年どこからか背負ひ込で來た麻疹が、ますます酷くなつて、穴が明いたとか腐れかゝつたとかで、よく湯上りに椽燵で嬾に見せて居た。僕もよく、何氣なく窓を開けて、野郎が餘念なく一物に頬冠をさせて居るところを見たことがある。明けツ放しの、何でも大きな聲でいふ男だが、それでも多少耻を知つ

てると見えて、一物を抱へるやうにして、躊躇んだまゝ戸袋の陰へ隠れた。

そんなことを度々見るので、僕は奴の這入つた後でお湯を貰ふのは嫌やで仕様がなかつたが、親切さうに勧めるものでから、三度に一度は嫌やとも言へず、おツかな喫驚で、貰つて居たが、偉いことになつてしまつた。便所へ行つたら針を突き刺されるやうに一物の髓が痛くつて、あわや飛び上らうとした。

シア失敗ツた！と思つたが最うおツつかない、前途有爲の身を以つて、今の若さで廢物にしては由々しき大事である。妻がよく謝絶れといつた言葉に對しても、實に申譯がない。

『だから妾がいはいンことぢやない、謝絶れば好いンですのに。』

『謝絶れば好かつた。滅多に風呂などで傳染るものぢやないと思つたが、疵があつたからだらう、仕方がない、醫者へ行つて來やう、酷ひ目に逢はしやがつた。』

錢金には代へられない。自分一箇の不幸でないから、どうあつても早く癒さなければならぬと思つて、早速花柳病専門の醫院へ出掛けた。

看護婦に跟いて診察室へ這入ッたら、誰も居なかつた。椅子と寢臺と戸棚を置いた六疊で、餘り景氣の好い家ではなささうだ。暫らくボカンとして居ると、よく肥へた三十五六の、白縮緬の兵子帯を締めて紋附の羽織を着た男が出て來た。ちよつと應柄な顔をして居るから、すぐ先生だと思ツた。

掛けろといふから椅子に腰をかけて、除ろに來意を述べた。餘り自慢の出来る來意ではないが、安物を買ツた覚えがないだけに、稍や零し加減に述べた。

然し、先生はそりやお氣の毒だといふやうな顔もしない。怪しからんと思ツたが喧嘩にもならんから黙ツて居ると、羽織を手術衣に着更へて來て、防水布の椅子にかけろといふから、御言葉に従つてかけると、蓋も實もなく前を擴けて、可哀想に人の物だと思ツて捻くりひん廻した上、看護婦が持つて來たコップの水薬をスポイトに唧ませて、キューと注入した。イヤその時の痛さ、まるで沸湯を注ぎ込まれたやうに痛い。小便袋がちよまツて、ペコ／＼としたやうな氣がする。

『ワァー、痛い。』といひたかつたが、男の體面に拘ると思ツたから、やうやく我慢した。それも一度や二度ならまだしも、同じことを五六度繰返して、上句の果ては藥を注入したまゝ、先を抓んで居ろといふ。罪なことをさせるものだ。男子の面目が何所で立ツ、侮辱の極だ。それも醫者は眞面目くさツて、平氣で斯ういふ醜態を演じさせるのだから怒れもしない。

よく小學校時代に、悪戯をして罰をくツて、茶碗に水を入れて零さぬやうに一時間立たされたことがあるが、それよりも一層酷だ。先を抓んで顔を擧めて居る具合を側面から見たら定めしボンチ繪にも書けない奇觀だらう。

その奇觀を、凡そ半月ばかり續けて、やうやく快くなツた。まづ好かつたと、急に大きくなツたやうで、染々健康の有難を感じたが残して置かなきやならぬ筈のお産費用は、お蔭で一文も残らないばかりでなく、古本は元より本箱まで毆き賣ツて、残つて居るのは筆筒と鼠不入ばかり、赤貧洗ふが如しといふよりも、旋風にそっくり家中の物を持つて行かれたやうな有様だ。

『嫌でせうけれど、續けて二三冊書いて頂かなきや如何にもなりませんわ。』

妻は七月のほて腹を抱へて、肩で息をして居る。エ、忌々しいやら情ないやら、
 『ウム、書くさ、一生懸命に書いてやる。早く手が行き届いたから好かつたが、酷ひ
 目に逢はしやがった。彼奴、碌な死態は出来ないぞ。』

『まだ癒ちないやうですねエ。』

『癒るものか、吝嗇だから、手療治ばかりして居やがるんだもの、あれで癒ッたら
 不思議だ。』

『さうですねエ、早くお医者にかゝれば宜しいのにねエ、穴が明いてるから、最う手
 術をしなきや癒らないんです。赤十字病院へ入院するとかいつてるさうですよ。
 大方役所から、無料で行くんでせうよ。』

『そんなことだらう。如何せ金を出して行く奴ぢやないよ。切られたら彼奴、泣くだ
 らうなア、見物に行ッてやりたいや。』

『そんなに痛いのでせうか。』

『痛いとも、切るんだもの。』

『まア、早く、そんなにならない内に癒せば宜しいのにねエ。最う良人、決してお隣
 りのお湯を貰ッちや不可ませんよ。』

『貰ふもんかい。お禮の百萬陀羅をいつて、痲病を貰やア世話はない。』

こんなな思ッて居るのに、隣りの奴は時々お湯をたてると、親切さうに這入れとい
 ふ。家賃を滞らせないお禮心だらうが、痲病で御丁寧に穴まで明けて居る息子が一番
 に這入ッて、ひいき目にすぐ後へ這入されるのは此上もない迷惑だ。態と當て付けが
 ましく、

『僕ア痲病ですから、もし傳染ると氣の毒だから止めます。』と、斷ッてやツたが、一
 向平氣だ。無神經な奴にかゝツちや遣りきれない。

『さうですか、貴君も痲病ですか。』と、息子は寧ろ同病相慰むやうな言ひ方だ。畜
 生奴、汝等と一緒に見られて堪るか。貧乏はして居ても人間の位が違ッてらア。斯
 う言へば汝が仕舞風呂へ這入ッて、お爺さんでも先きへ入れるかと思ッたら、何の。

『オイお仲、お隣りで這入らんといふから、お前這入りな。』と來た。

嬢も嬢で、お爺さん先きへお這入んなさい——とも何とも言はないで、女の癖に男より先きに這入って澄したもんだ。あんな奴こそ罪亡しに感染れば好いんだが、どうも感染って居さうにない。尤も近頃になつて、大學へ行つたとかいふことだが、恐らく感染ツのだらう。好い氣味だと思つたら、何がさて、先方は無神經の木念人だから平氣なもんだ。

「妾最う子供は出来ないのださうですよ。」と、却つて厄拂ひでもしたやうな積りで、家で洗滌へといはれたのに些とも洗滌はないで、血膿が出て平氣だといふんだから、こんな奴にかゝつては嚴罰を與へる神も張合がないだらう。

一體が各で、両親に梅干ばかり食はして、稀に鹽茹のヒヂキを食はす位が關の山。魚の骨や牛の小切を買つて來た時は、老年夫婦には香氣だけかゞせて置いて、若夫婦と餓鬼だけで食ふのださうだから、薬を買ふのも惜しいのだらう。

僕も十餘年來世間を放浪して來たが、こんな慘酷な不孝者が、我が日本に居やうとは想像もしなかつた。お爺さんが意氣地がないからか、息子が馬鹿だからか知らない

が、兎に角、よくも斯う因果な奴ばかり寄り合つたものだ。

亭主野郎は一物に風穴が明いたので、使用上不便を感じたからか、或は無料で入院出来るからか、兎に角入院するさうだ。隣家へだけ頼んで、コツソリ行くと例の聲高にいつて居たが、別に留守中を頼みにも來なかつた、來ないで幸福さ。

靴を如何したとか三味線を持つて行きたいとか、宛然物見遊山に行くやうな騒ぎをして行つた。コツソリだか大ビヲだか知らないが、後で嬢が近所へ残らず吹聴して歩いたから、常には餘り知らない人まで好く知つて居た。

明日は彼奴、切られて泣くんだなと思ふと、顔を染々見直してやりたいやうな氣がした。どんな手術が知らないが、男妾をして「然うだわねエ」とか「さうよ。」とか、顔に似合はぬ、安芝居の女形のやうな言葉を使ふ奴だから、屹度キイーとかヒイとか泣くに違ひない。

翌日嬢と赤阪とかの姉が、御隠居のお供をして手術の立合に行つたさうだが、夕方歸つても泣いたらしい話はして居なかつた。泣かない筈はないのだが、聞けるものなら

聞いて見たいやうだつた。

その後隣りの嬪は、妻によく病人の話をして、誰が昨日見舞に行つてくれたとか、誰が明日行つてくれるとか、暗に見舞を請求するやうに言つたさうだ。

『一度は行つてやらなきゃ不可ませぬねエ。』と、妻もその氣になつて居る。

五月蠅いことが又持ち上つて来た。奴のために散々痛いめをさゝれて、薬代を注ぎ込んで、お負けに野郎の見舞に卵の折でも持つて行けば、これが本當の踏んだり蹴たりだ。屎馬鹿にして居やアがる。

『誰が行くものか、知らん顔をして居てやれ。』

『だつて、一度位は行つてやらなければ……。』

『一度も半分も行くものか、家で病氣をしたつて、何一ツ見舞を持つて来たことはないぢやないか。然かも奴のために俺アどんなに苦勞したか解りやしない。』

『それも然うですなエ。妻が去年の夏病氣した時だつて、良人の留守に、如何ですかと聞きに来てくれなかつたのですからねエ。』

『さうとも、お互ひ様だ。』

僕はどんなことがあつても、決して見舞には行かない積りだ。散々迷惑をかけられた上、餘計な散財や餘計な暇潰しをさゝれて堪るものか。半年でも一年でも入院するが好い。

(四)

一月ばかり経つて、明日か明後日退院するといふ話だつたが、何日歸つて来たのかわらなかつた。何でも病院からお座敷へ出て居たといふことだから、夜遅く歸つて来たのだらう、朝訃聲を聞いて、始めてオヤ歸つたなと思つた。

歸つても四五日役所へは出なかつた。斯ういふ時に休まなければ休む時はないと思つて居るんだらう。夕方になると三味線を持つて出掛けるやうだつた。二三人来て居た弟子も、まだ一人も來ない。

見舞に行つてやらなかつたから、家へは態々禮には來なかつたが、庭へ出た序に裏

口へ覗いて留守中は色々御厄介様でとお禮をいッた。お禮をいはれる筋はないのだから、却ッて丁寧にははれると氣持が悪い。御厄介に出来る餘裕はないんだ。

それから二三日して、朝早くからバチ／＼薪を燃してゐるやうな音がしたから、硝子戸からそツと覗いた見たら、お爺さんが古杭を燃して蒸し物をやッて居る。はゝアお返へしをするんだなと思ツたから。

「オイ、隣りぢやお赤飯をふかしてゐるやうだぜ。」と、妻に知らせた。

「さう。では矢張りお返しをするんでせう。ほう／＼からお見舞を貰ツたやうですからねエ。」

「家へは持つて来ないだらうなア。」

「さあ、持つて来るかも知れませんよ。」

「来られちやちよツと具合が悪いなア、如何したら好いだらう。」

物を見せびらかされるのは、誰だッて餘り好い氣持の物ぢやないが。見舞に行かなかツた腹癒せに、お赤飯の蒸氣だけ見せびらかす積りかも知れない。瘦せ我慢をいふ

譯ぢやないが、客な眞似をしてくれるな。失禮ながら赤飯なぞ欲しくもない、然し、他家へだけ遣ッて家へ持つて来ないとなると、なんだか仲間はずれにされるやうで心持が悪い、といつて持つて来られても頗る迷惑だ。アゝ然うですか——と平氣で貰ツて置く譯には行かぬ。

斯うなると。どちらにしても餘り心持が好くない。こんな事なら見舞に一度行ツてやればよかつた。世間並のことは矢張り世間並にするものだ。世の中といふものは、元々五月蠅いものに出來て居るのだから仕方がない、此五月蠅い世の中に處して、巍然として習慣に左右されず、飽くまで眞面目に理想通りに生きて行ける人は餘ッ程偉い人だ。

「矢張り行ツてやれば好かつたなア。」

「さうでせう、だから妾がいつたのですよ。良人は、遊んで居ても行かないんですもの。」

「遊んで居たツて、ボカンと遊んでるのぢない。身體は遊んで居ても頭が働いてる。」

口へ覗いて留守中は色々御厄介様でとお禮をいッた。お禮をいはれる筋はないのだから、却ッて丁寧にははれると氣持が悪い。御厄介に出来る餘裕はないんだ。

それから二三日して、朝早くからバチ／＼薪を燃してゐるやうな音がしたから、硝子戸からそツと覗いた見たら、お爺さんが古杭を燃して蒸し物をやッて居る。はゝアお返へしをするんだなと思ツたから。

「オイ、隣りぢやお赤飯をふかしてゐるやうだぜ。」と、妻に知らせた。

「さう。では矢張りお返しをするんでせう。ほう／＼からお見舞を貰ツたやうですからねエ。」

「家へは持つて来ないだらうなア。」

「さあ、持つて来るかも知れませんよ。」

「来られちやちよツと具合が悪いなア、如何したら好いだらう。」

物を見せびらかされるのは、誰だッて餘り好い氣持の物ぢやないが。見舞に行かなかつた腹癒せに、お赤飯の蒸氣だけ見せびらかす積りかも知れない。瘦せ我慢をいふ

譯ぢやないが、吝な眞似をしてくれるな。失禮ながら赤飯など欲しくもない、然し、他家へだけ遣ッて家へ持つて来ないとなると、なんだか仲間はずれにされるやうで心持が悪い、といつて持つて来られても頗る迷惑だ。アゝ然うですか——と平氣で貰ツて置く譯には行かぬ。

斯うなると。どちらにしても餘り心持が好くない。こんな事なら見舞に一度行ッてやればよかつた。世間並のことは矢張り世間並にするものだ。世の中といふものは、元々五月蠅いものに出來て居るのだから仕方がない、此五月蠅い世の中に處して、巍然として習慣に左右されず、飽くまで眞面目に理想通りに生きて行ける人は餘ッ程偉い人だ。

「矢張り行ッてやれば好かつたなア。」

「さうでせう、だから妾がいつたのですよ。良人は、遊んで居ても行かないんですもの。」

「遊んで居たッて、ボカンと遊んでるのぢない。身體は遊んで居ても頭が働いてる。」

お前などは、ペンさへ持つて居なまやすぐ遊んで居ると思ふだらうが、そんなものぢやないよ。」

「だって、行く氣なら行けないこともないんですのに……。」

『行けないよ。』

妻に怒つて見たつて仕様がなすが、金銭上ばかりでなく、止むなく行けなかつたといふ理由を捏ね上げないと氣が咎めて不可ない。眞直に白状すれば、時間が惜しかつたのではなく、實は見舞の品を買ふ錢が惜しかつたのだ。痲病を感染されて金を費つた上、見舞を持つて行くのが忌々しかつたのだ。

赤飯の少しばかり貰ひたくはない。不常三國同盟の飯を食つて居やがるから、何か事があると自慢らしくやりやがる——と稍や反抗的に思つて居ると、御免なさいと隣りの嬢が裏口へ來た。

サア來たぞと目配をすると、妻が立つて行つた。お爺さんと息子のを兼ねて、快氣祝の眞似事をしたのだといつて、嬢が袷袢をかけた重箱を出した、僕は何だか體裁が悪

いやうな氣がしたから、隠れやうかと思つたが、二間ぶつ通して見え透いた小さい家だから、隠れることも出来ない顔を見て黙つても居られないから。

『どうも濟みませんア。』といつた。

全く濟まない。幾等僕が慾張りでも、貰ふ筋のない物を貰ふのは心苦しい。例令着てる物を脱いでも、まるつきり只で貰いたくない。尤もお爺さんとお婆さんの見舞を兼ねて、卵を九ツ遣つたけれど、此方は何も貰はない積りで、態と新聞紙にくるんで持つて行つたのだ。それに斯う御丁寧に袷袢までかけて來られちや、恐縮が通り越して迷惑だ。

『オイ、此まゝ貰つといちや濟まないア。』と、嬢が歸るとすぐ僕は妻に相談をかけた。

『さうですなエ、何もやらなかつたから、お赤飯だけ持つて來たのでせうけれど、此まゝにして置いたら、またお嫁さんが近所へ行つて、見舞は貰はないけれどお赤飯を遣つたと吹聴するかも知れませぬエ。』

『全く五月蠅い嬾だからなア。何か遣らうぢやないか、後からだつて好いだらう。』
 『宜いでせうとも、お祝ひの日ですから何かお頭付きでも、少しばかり遣れば宜いのですわ。』

『さうだ、やれく、何かお前来て来い。』

妻は大きい皿を持つて、すぐ出て行つた。斯うなりや意地だ。妻のお産を目前に控へて居る矢先だが仕方がない。人間は要するに義理より意地だ。暫くすると、妻は七寸ばかりの鯨を三尾勿體らしく熊籠に列べて持つて歸つた。

『今日は不漁で、何にもありませんの、やうやく此魚だけありましたから、好からうと思つて取つて来ましたたが、好いでせう。』

『ア、好いともく、立派なもんだ。高價かつたらう。』

『エ、これで十三錢つゝですの。』

『十三錢？すると三尾で三十九錢か、可からう、それなら大威張だ、早く持つて行つてやれ。』

幾等貧乏はしても、たゞ物は貰はないぞ、あんな赤飯を少しばかり貰つて、三十九錢の魚を遣りや大威張だ。これなら眞逆ツリを取つたとは云はないだらう。お爺さんが盛んに氣の毒だといつたさうだ。氣の毒に違ひない。これで氣の毒でなかつたら、麥飯で鯉が釣れて、一文錢で淫賣が釣れらア。

『それでもお爺さんは、まだ氣の毒だと思つてるから好いよ。さういはれると遣り甲斐があるが、嬾なぞは當前だと思つて居やがるだらう。』

『エ、お嫁さんは……第一お魚の相場を知らないでせう。』

『チエ、厄介なオタンチンだなア、それぢや何を遣つても張合がない。』

物を遣つて。價值を認められないほど癪に障ることはない。取られたものなら又考へやうで諦めもつくし、溝へ毆き込んだのなら直接に反響があるけれど、遣つたものは先方任せで、勝手の評價をされるんだから遣りきれない。稀には嬾奴、魚屋の店先へ立ち停つて、時の相場でも見やがれば好いんだ。

他家からも一二軒魚を持つて来た奴があるらしい。亭主が勝手へノサバリ出て、あ

れを焼いて是れを鹽にして——と、例の大聲で家内中に相談しながら、乗氣になつて料理をやり出した。まア斯ういふ騒ぎでもしてくれれば、幾等か遣り甲斐があつて氣持が好い、大方半月あまりもチビリ／＼食ふつもりだらう。

僕は何日もよく思ふのだが、我々の収入は直ちに仕出で、収入の高下に従つて矢張りそれと大同小異の支出が何所／＼から湧き出して来る。不思議なほど収入に支出がくツ附いて居る。今度など、お産があるからと思つて、随分一生懸命に書いたが、矢張り下らない物入がヒヨコ／＼勃發して、お産に對する餘裕は些とも出来ない。これでは困る。如何にかしなくちや——と思つて居る内に、妻の腹はいよく膨れて、いよ／＼臨月になつてしまつた。何日何時飛び出すかも知れぬといふ。頗る心細い月になつて来た。仕事をするにも、おち／＼して居られない。なんだか宙腰になつて居るやうな心持だ。

妻が大きな腹を抱へて、ヨタ／＼掃除でも始めると見ては居られない。好いから止めろといつても、人が來ると見ツともないからと、曲らない腰を苦しうにしてやる。斯うなると危なさうで呢と見ては居られないから、勢い立ツて行ツて僕が行ることになる。その外三度々々の飯の支度から、蒲團の上げ下しまで僕の手一ツだから遣り切れない。

『それでも、大きな腹を抱へた妻がやるのを見て居るより大きにました。可愛い腹の赤ん坊の爲だと思ふと、張合がある。何日からともなく、最う親子三人といふ氣分で、昨日まで青年だと思つて居た僕が、そろ／＼親馬鹿チヤンリンになりかけたやうだ。子供か出来ては困ると思ひながらも可愛くツて、嬉しくツて飛び出す日が待ち遠い。植木室の嬢が、奥さんのお腹は左が大きいやうだから、屹度男のお子さんですよといつた。男なら有難い、陸軍大將だと思つて、妻の腹を見ると、どうも右のやうにも思はれる。女だツて可愛くツて好い。食ふ物を食はなくツても、縮緬の着物でも着せてやる。

それにしても、まづ何よりも金儲だ。愚圖々々しては居られない。残して置きたいと思つたお産の費用は、些とも残ツて居ないんだ。一週間ほど前に、赤ん坊が豫告し

てくれ、ば好いけれど、唐突けに出るんだから遣りきれない。僕等のやうな生活状態では。金の多少に拘らず、唐突の物入が一番禁物だ。

『一體何日頃出るだらう。なアオイ。』

『そんな事が解るもんですか。お産婆さんのいふことだッて當にはなりませんわ。』

お産婆さんは二十四五日だらうといふ豫測だ。その二十四五日にはまだ一週間ばかりあるから、大體に於てそれを標準にして居るが、如何も安心が出来ない。妻が口を歪めると、出さうなのかと思ふ。俯伏して居ると、お腹が痛いのかと思ふ。妻の一顰一笑によつて、僕の舉丸か上ツたり下ツたりする。火薬を抱いて火に臨むが如しいふ不安だ。

『苦しいでせうけれど、成るべく早く原稿を書き上げて下さいな。もし早く出ると大變ですわ。』

『ウム、早く出られちや大變だ。仕方がない、徹夜をするさ、少々青くならざるを得ない。何日もならナアニ大丈夫だといひたい所だが、出物腫物を扣へて居る矢先、さう

暢氣にかまへちや居られない。嬢の死骸を据ゑつけて、睨みツこをしながら辭書の編纂に苦心せられた大先生のやうな度胸は逆もない。人情があり過ぎて、責任を重んずる性質だから止むを得ない。

『それで、幾等あつたら足りるだらうなア。ギリギリ結着、極く質素にして——。』

幾度も聞いたことで、僕にも多少の豫算があるし、第一幾等要るにしても、一冊の原稿料しか入る當はないのだが、聞きて見ないと氣が濟まない。

『さうですわねエ、お産婆さんに幾等しますかねエ。』

『なるべく少いで我慢して貰ふさ。』

『でも三圓位はしなきゃなりませんまいねエ。』

『三圓か、それから。』

『それから……それはまア、それはお七夜にすれば好いんですけれど、それまでに大部要りますわ、生れた日に、鯉節とお米を一升お産婆さんにやらなきゃなりませんし、胞衣會社へも遣らなきゃなりませんし、脱脂綿を買って置かなきゃなりませんし、そ

れから、種々な目に見えない物が随分要りますわ。』

目に見えない物ツて、眞逆肺病の微菌でもあるまい、だいぶせんいが續いたやうだから、相等に要るだらう。

『つまり、全部で幾等あつたら好からう。十圓も要るかなア。』

『要りませうよ。』

なんだ、そんなには——といふかと思つたら要りませうよと來た。コリヤ餘ツ程質素をしなきや足りなくなるかも知れない。走ン は出來たア後で一文なしたアでも困る。

馬車馬に大馬力をかけて、斯うなると一晩や二晩寝なくツても眠くない。油虫とか蜂だとか零して居る違もない、テンで考へもしない。いよく親馬鹿チャンリンになり澄して、産れる子供のことばかり氣にかゝる。

さて、やうやく百五十枚の原稿が、今日一晩で書き上るといふ午前三時頃、海老のやうに規則正しく寢て居た筈の妻が、ヒヨツクリ頭を擡けてウーンと迂鳴り出した。

サア大變だ。胸がドキリとして耳朶が暖くなつた。心臓の鼓動が手に取るやうに響く、四邊がシーンとして居るからなほ心細い。

無鐵砲に、悪い時に出さうになつたものだ。産婆さんへ駈け付けるにも近所を起すにも、僕一人では如何にもならない。コリヤいよく途方もンだ。ハツと驚いて呢と見て居ると。

『良人!』といふ。

『如何した。』と、落着いたやうには答へたが、側へ行ツても如何して好いやら解らなから、手の附けやうがない。妙に心細くツて、氣味が悪くなツて來た。

『便所へ行かして下さい。』

『便所へ……………。』

未だ嘗て妻に用便をさせたことはない。子供なら足を擴げてシーとやるものと知ツてるが、大人ではちよツと見合が悪い、如何したら好からうかと棒のやうに立ツて居ると、妻はモグ／＼起き出した。起きるだけなら好いが、アツ、といふから驚い

た。心細い。慌てずには居られない。

『オイ、起きてても好いのかい。大丈夫かい、何所が如何痛いんだ。』

妻は僕の手へ縋りついた。

『痛み方が烈しいから、出るか知れませんわ。』

『出る！、そりや大變だ。今出られちや、困ったなア如何せう、オイ、如何も困ったなア。便所なんぞ行くのは止めとけ。』

『イ、エ、ちよつと行かして見て下さい。』

『だつてお前、大丈夫かい。何ならお前、其許へしちやつたつて好いちやないか。』

便所の中へ尿と一緒に放り出されたら大變だ。世間にはよくそんな粗笨しい奴がある。現に高田の嬢がやつたし、新聞などにもよく出て居る。落される方だつて災難で、悪くすりや助からないかも知れぬ。假令助かつたにしても、尿壺で初湯を使はせるのは可哀想だ。

『大丈夫よ。さう急には出ませんよ。』

妻は腰を曲げるやうにして、僕の手を力に、ソロリ／＼便所へ入った。僕は戸を細目に開けて、犬の如く番卒の如く立って居た、妻が淋しいだらうと思つたからでもあり、もし一大事が勃發したらと思つたからである。臭くもない。汚なくもない、イヤ少々臭いには臭いが、最少し中が廣ければ一緒に入って居ても好いと思つた位だ。妻は五分間ばかり蹲居で居て、またソロリ／＼出て來た。好い鹽梅に、尿と一緒に生れもしなかつた。手を取つてやると、相變らずハア／＼言つて居る。困ったことになつた。如何せ斯うあるべき覺悟はして居たが、早く出て貰ひたいものだ。

『まだ痛むかい。』

『エ、。』

『何か出たのかい。』

『少し、下り物がしたやうですわ。』

『さうか、柿木室の嬢でも起きて貰をうか。』

『イ、エ、まアそんなになくつても宜しいですわ、良人は、まだ餘ッ程書かなきや

ならないのでせう。』

妻は此期に臨んでなかく、落着いて居る。人生の大任を繊弱い身に引受けて、立派に果し申すといふ覺悟が見える。偉いものだ。

『ウム、ナニ、最う直ぐだ。』

僕も須らく搦手を引受けて、飽まで妻に心配させてはならぬ。此様子では一刻も猶豫して居られないぞ。

『なるべく、早く、書いてしまつて下さい。』

『ウム、大丈夫だ。最う書き上ツたやうなものだ。夜が明けたら直ぐ持つて行つて来る。』

『ア、痛い、痛いわ良人。』

『ドレ。何所だい。少し、撫でゝやらうか。』

妻の痛がるのを見て居ると、僕まで如何やら痛くなつて、泣き出したいやうだ。矢張りコリヤ大變だ。愚圖々々してると出るかも知れない。

『そつと、……………、下へく撫でゝ、ア、痛い。』

『痛いか、我慢しろ、我慢してくれ。』

『痛いよ——。』

『我慢してくれ。』

これぢや逆も助からない。僕の方が氣が揉めて、痛い者よりまだつらい。如何かして、出来るものなら少しでも苦痛を軽くしてやりたいが、勝手が解らないから如何することも出来ない。一生懸命に撫でゝも、一向効き目がなささうだ。早く夜が明けて、誰か来てくれゝば好いのだが、まだやつと四時だ。四邊は物凄くいほどシンとして居る。困つた、困つた。半泣きだ。

『如何だい。植木室でも起きて貰をうか。』

『さうですなエ。』

『そして、産婆さんと呼んで来やう。もし今夜の中に飛び出して、間違ひでもあつたら大變だ。』

全く大變だ。勝手が解らないから猶ほ大變だ、僕の方が助けてくれ——といひたいやうだ。

(五)

お腹を一生懸命に撫でたが、一向痛みが止りさうにない。此上は助け船を呼ぶに如かずだ。迎も一人の手には合はない。

「好いか、俺はちよつと植木室を起して來るぜ。」

「エ、。」

「我慢して居てくれ、一寸の間だ。」

後に氣が残るが、眞逆家から吐鳴る譯にも行かぬから、大急ぎで飛び出した。初夏ではあるが夜の風は冷たい。星がキラ／＼と好く晴れて居る。暗い足元を氣にもかけず、觸つたら植木鉢でも蹴飛ばすつもりで、植木室の前へ行くと破れ戸の隙から電氣の灯が透ひて見える、よく寢入ッてるやうだ。鼾が聞へる。

「今晚は……お早やう……。」

續けて二聲呼んだが、返辭はない。耳を澄ますと相變らず鼾聲をして居る。來る時には大聲で吐鳴ッて、歐き起す位な勢だツたが、さて來て見るとさうも行かない。氣の毒である。

「木村さん、……木村さん。」

段々聲を大きくした。氣の毒でも起さずには居られない、それでもまだ寢て居る。

尿ッ、よく寢る奴だ。妻が齒を噛ひ縛りながら待ッて居ると思ふと、躊躇して居られない。

「木村さん、一寸起きてくれませんか。」

トン／＼、と戸を歐いた。

「濟みませんが一寸起きてくれませんか。」

ます／＼戸を歐いた。

「へエ。」

嬢が目を覺ました。寢着け聲で返辭をする。

「誰何？」と、亭主も突劍頓にிட்ட。

「僕です、濟みませんが、赤ん坊が出さうで困ッてるんですよ。」

「ア、然うですか それア……………」

嬢は始めて合點して、驚いて、慌てゝ起きたやうな氣配である。

「誰だい。」

「三宅さんさ、奥さんが産氣附いたんだよ。」

中ではこんな會話が取り交されて居るやうだッた。僕はまア好かつたと思ッて飛ぶやうに家へ歸ッた。

妻はまだ苦しんで居る。

「まだ痛いか。」

「ア、苦しい。」

「困ッたなア、最う少し辛棒して居てくれ。木村の妻君が來たら産婆さんを呼んで來

るから。」

「撫でゝ、撫でゝ下さいよ。」

「ア、可しく。」

劍突をくツても肱鐵砲をくツても、唯々諾々とお言葉に従ふ外はない。植木室の嬢も何を愚圖々々して居やアがるんだらう。ちよツと着物をひッ掛けて來てくれゝば宜ささうなものだ。

「お臍の兩脇から下へ……………」

「ウム、斯うか。」

「あゝ、苦しい、苦しいわ良人。」

「仕様がななさ。」

また僕は泣きたくなッて來た。早く植木室の嬢が來てくれんなア、白粉を塗つて來る譯ぢやあるまいに、何を愚圖々々して居やアがるんだらう。

「苦しい。」

「確然してくれ。木村の妻君が来たら、直ぐ産婆を呼んで来てやるからな。」

「ア、苦しい。」

妻が苦しいと呻くと、僕は壽命が縮みさうだ。ハラ／＼して、居ても立っても居られない。いつそ飛び出して植木室の嬢を引張って来やうかと、氣をいら／＼させて居ると、やうやく嬢が来てくれた。

「大邊痛むやうですねエ。」

「痛むんですよ。僕一人で如何にもならんから、困ってしまつた。」

嬢の顔を見てポツとした。大邊氣強い。これが本當の助船だ。

「奥さん如何です。」

有難う、痛くツて、苦しくツて……、濟みませんねエ。」

痛には變りはなささうだが、妻も氣強く思つたらしい。

「氣を丈夫にねエ。ナアニツて氣になつて居なきや不可ませんよ。出てしまやアケロリと癒るんですから、お産はねエ、誰でも痛むんだから仕様がありませんわ。」

「氣を丈夫に持つて居なきや不可ないよ。ナアニ病氣ぢやないのだから大丈夫だ。」

嬢の直傳によつて、妻を慰めると同時に僕もナアニといふ氣になつて、下腹に力を入れて思はず知らず僕自身が意氣張ツた。

「何時頃から痛み出したのですか。」

「ナアニ、つい先刻なんですよ。尤もちよい／＼痛いとはいつて居ましたが、先刻便所へ行くといつて、それから痛くなつたのですよ。」

「然うですか、些とも知らなくツて、サア私が旦那變りますから、少し揉みませう」

「濟みませんなア。では僕は産婆さんと呼ばに行つて来ますから。」

「イ、エ。お産婆さんへは良人で行くさうですから、……何をしてるんだらうねエ、良人さんは……。」

「ナニ、僕が行きますよ。」と、慌てゝ飛び出す出合頭に、木村が紺の筒袖で腕組をしてやつて来た。

「如何ですか。」

「ヤア、濟ませんなア、あんな苦しがるもんですから……。」
それと知ッて嬢が

「良人さん、早くお産婆さんへ行ッて上げて下さいよ。」

「ア、解ッてるよ。」

解ッてるか知らんが、直ぐ飛び出しさうにしないから、後に氣が残るけれども、一走り駆け付けて来るつもりで、

「イヤ好いです、僕が行ッて来る。」と、駆け出さうとすると、

「ナニ、私が旦那さん参ります。」と、急ぎ足に行き出した。あの鹽梅では餘り急いで行きさうにもないが、僕が行くとも斷れないから、氣は濟まぬながら妻の枕元へ引き返へした。苦しい呻吟き聲を聞いてるより、駆け出した方がどんなに氣が安まるか知れない。

「少し變りませうか、手が疲れたでせう。」

「イ、エ、私は關ひませんから、お湯を沸して下さい、間に合はないと不可ませんか

ら。」

「何にするんです。」

「お産婆さんが来ると要りますから、お釜でねエ。」

「さうですか、では……。」

僕はすぐ勝手へ飛び出して、キヨロノノと見廻したが水がない。さうだ、まづ水を汲ンでと思ッて洋桶を提げて井戸端へ行ッた。何でも忙しさうに要事をするに氣が紛れる。大急ぎに汲ンで、殆んど駈足で歸ッて来たが、まだ夜が明けないから暗い。道は心覺えて目を瞑ッても歩けるが、垣根に棒が出て居るのを避けやうとしたはづみに、ヨロノノとして齒の缺けた日和下駄を踏みはづした。失敗ッた！と思ふと同時に右手の洋桶が揺れてバツサリ腰から下へ水がかゝツた。

「チエ！」と舌打したが仕方がない。裾がすつぷり濡れてボタノノ滴が垂れる。着物が足へ貼りついて氣持が悪い。情ないやら忌々しいやら、口惜涙がポロリと出た。

「ヤア、酷ひ目に逢ッた。」

『如何しました。』

『下駄がひっくり返って着物を濡しちゃった。』

『まあ。』

『仕方がない。一枚看板を濡らして着る物がない。』

裸體になつて絞って見たが、逆も着て居られさうもない。六月の末だが夜はまだ寒い。

『良人、ネンネコでも、着て居らっしゃい。』

苦しみながらも妻がいふ。なるほどそれに限ると思つて、押入れからネンネコ袴天を出した。序に夏布團の薄い奴を出して、車夫のやうに腰へ巻き付けた。此際格好なぞいつて居られない。幾等見得張りたくつても、斯うなりや貧乏世帯は無色透明で、何點から見ても見透しである。

『此奴は少々歩き難い。』と、一人言をいひながら股を擴げて裾に餘裕を拵へ、腕を左右に伸して胸の膨みを腋の下へ入れた。自分ながら可笑しくなつたが、笑つては居ら

い。木村の嬢も妻の腹を撫でながらちよいと偷目に見るやうだつたが、笑つては不可ないと思つたんだらう笑つたやうな様子はなかつた。

どうもギゴチなくつて、力士の眞似でもして居るやうだ。我ながら自分の身體が巾ツたくつて、襖へぶつつかつたり壁へ摺れ合つたりして工合が悪い。分けて狭く苦しいお籠の前へ躑躅むのは無理だつた。第一關節の折れ曲りが不自由で、廣袖で火消壺をひっくり返へすやら十能を忤すやら、暗いのためからますます騒ぎだ。

やうやく手探りで木片を入れて、燃し付けやうとすると、どうも袖が邪魔になつて、燐寸が外方へ行つて火箸が巧く使へない。屏忌々しくつて敲き付けてやらうかと、口惜し涙が最少しで出る所だつたが、苦辛の功が現れて、やうやく薪に燃え付いた。

妻は微かにウン／＼迂鳴つて居る。

『く、苦しい。あ、つー。』

底力のある。寸毫の餘裕もない呻吟だ。僕の身に恐ろしい何物かど押し迫つて来るやうで、凝として居られない。枕元へ行つて、蒲團を巻き付けた膝をチョコナンと下

して、妻の顔を差し覗くと、譯もなく気が揉めて、泣きたくなつて来る。生物の繁殖は自然の擁護によつて出来るべき筈なのに、此の苦しみをさせるとは頗る心得ぬ。「俺の仕事を手傳つてくれ、その變り拳固をくれる。」といふやうなもんだ。そんな無茶なことがあるもンか。怪しくりからん、幾等讓歩しても、堅い尿を放り出す位な程度に止めて置いて貰ひたい。

「困つたなア、随分痛さうだなア。」

「痛むんですよ、出て仕舞やアなんでもないのですがねエ。」

「如何したんだらう、まだ木村さんは歸つて来ない。」

少し苦情らしく言つてやツた。此際、他人のことゝは言ひながら、急いで行つてくれゝば好さうなものだ。多分愚圖々々して居るんだらう。こんなことなら他人を頼まないで、自分で飛び出せば好かつた。

「最う歸りませうよ。」

嬶も落着いて居やアがる。

勝手にゴトンと音がした。

「あら薪が燃ゑ落ちたやうですよ。」

「あ、そいつは大變だ。」

急いで立ち上ツたが、蒲團を巻いてるから小敏しく歩けない。忙しいことだ。薪が燃ゑきれて板の間へ落ちて居る。どうも身體が巾ツたくツて、狭い板の間へ蹲踞むのさへ容易でない。今日この騒ぎの中で、着物を濡らすなんてのが既に自裂たい。貧ずりや頓する。藁打ちや手打つ、轉けりやビツチャリ尿の上といふことがあるが、全く尿の上へビツチャリ尻餅を搗いたやうなものだ。尿忘々しい。

轉がり落ちた火を拾つて、新たに薪を入れてやうやく又燃ゑ出した頃、待ち兼ねた木村が歸つて来た。最う空には星が小さくなつて、夜は微白くなりかけて居る。

「すぐ参ります、なか／＼起きてくれないでねエ、俺れ、戸をウンと殴いてやツた。よく寝る家だんねエ。」

「さうですか、如何も有難う。」

まづ是れで一苦勞遁れた。産婆さんさへ来りやすく如何かなるものといはれる。

『旦那、私が燃しませう。』

と、木村は何もすることがないから、腕組をしてキヨロくしながら僕の背後に立って居た。

『イ、エ、好いです、君は夜遅いんだから、歸って寝てくれ給へ。』

『イエ、宜しいんです。最う寝る間はありません、何日でも五時には店へ行くんですから。』

『濟みませんでしたなア、早くから起して——、本統に構はないから歸って居て下さい、子供を一人寝かして置いちゃ不用心だ。』

實は竈の下を見て貰って、妻の枕頭へ行つて見たかッたのだが、立つと腰へ巻き附けた蒲團が見えるから工合が悪い。僕のことを旦那だなんて大いに敬意を拂ってくれているのに蒲團を見られちゃ聊か旦那の顔が立ち行かん。凝つと蹲でさへ居れば、ネンネコを素肌に着て居るとは見えぬ筈だ。木村は暫らく背後に立って居たが、僕が

退きさうもないので、用事があつたら言ッてくれといッて歸つた。

それから暫らくして、いよゝ夜がほのゝと明け渡つた頃、やうやく産婆さんが来てくれた。愚圖々々しやがッて尿忌々しい奴だと思ッて居たが。来て見ると矢張り有難い。吻として氣強くなつた。

『御苦勞様でございます。』

木村の媾は脇へ退いて、物靜かに小聲で言ッた。妻も聞き取れないやうな聲で御苦勞様で——と言つたやうである。

『だいぶ痛むやうですねエ。』

産婆さんは着き拂つて、靴から白のエプロンを出して身支度をする。主人たる僕が一應の挨拶を述べないのは失禮だと思つたから、腰の蒲團を板の間の隅へ置いて、素肌のネンネコのまゝ座敷へ行つたが、毛脛を出しては無禮だと思つたから、成るべく腰を低く、所謂尿放れ腰といふ奴で行つた。我ながら實に情ない次第だ。

『割合に早やうございましたねエ。』

「最う直ぐ出ませうか。」

「さう直ぐでございますよ。」

産婆さんは「此邊ですか」と妻のお腹を撫でゝ居る。だいぶ痛みは止つたらしい。

「時々キリ／＼と痛みますの。」

「さうでせう、下り物がありましたか。」

「エ、二時間ばかり前に……。」

「脱脂綿が買つてありませんか。」

産婆さんは木村の嬢と僕を見返つた。

「はア有ります。」

「それから、襦袢を出して頂きます。」

いよいよ事件が迫つて来たらしい。サア大變だ、愚圖々々しては居られない。お産の費用に當つた原稿は、まだ書き上つて居ないのである。まづ何よりも必要なのは金

だから早やく書き上げて取つて来なければならぬ。お湯も最うジャン／＼沸いたから、僕は板の間へ置いた蒲團をソツと取つて来た、肩からひツ被つて机の前に座つた。

さて、お産の方は産婆さんが居るから大丈夫だと思つても、何となく氣にかゝつてペンが動かない。何日やら痲病をやつたから、若し目の潰れた赤ん坊が出来はすまいか。盲目が出来たら大變である。隣りの主人奴、酷ひ目に逢はしやがった。もし然うだつたら、如何してくれやう。

何しろ早く出でしまへば好い。氣が揉めて堪らない、どうぞ安らかに、満足な子供が産れますやうに、當はないが何所かの神様に祈願をこめた。ペンを持つて原稿用紙に對して居ても、一向書くことが頭に浮んで来ない。尻がムズ／＼する。胸がワクワクする。頭腦は茫乎として殆んどとり止めがない。

出ない間に、早く書き上げたい。是れでは不可ン、これでは不可ン、はて困つた、如何書かうかと、無闇に氣がいらつばかりで、いよいよ困つた。

書いては消し、書いては消し、滅茶苦茶に急いで、やうやく八時頃に書き終つた。

自分にさへ何を書いたか解らぬ位だが、兎に角紙数だけは約束通りになつたが、赤ン坊はまだ出ない。妻は産婆さんと話をして居る。痛みが幾等か薄らいだやうだ。それとも産婆さんの手前氣を張つてるのかも知れぬ。

「俺アちよつと行ツてくるが、好いかなア。」

「早く歸ツて下さいねエ。」

「ア、。」

竈の前で乾かした着物が、生乾きになつて居たから、板の間の隅で着更へて袴を穿いた。少々冷たいが見えないのが何よりだ。

「御飯は良入如何して、先生に差上げて下さいな。」

「イエ、まだ宜しい。それより貴女が食べなきや不可ない。力をつけて、氣を張ツて居なきやなりませんよ、何でも欲しい物は今の内食べて置かないと、最う暫らく食べられはしませんよ。」

「さうですねエ、それぢやお蕎麥でも食べませうか知ら。」

「蕎麥はまだないよ。」

「さう、それではお壽斗は不可ませんか知ら。」

「不可なくはありませんよ。」

「ではねエ良人、妾、先生と二人で食べますから、お壽斗をさう言ツて下さいませんか。」

「あゝ、よし。」

何でもかでも、食ツてくれりや結構だ。食ツて力を附けて、一刻も早く意氣味出して貰ひたい。僕の子は、今狭ツ苦しい所へ居るんだ。どんなにして居るだらう。目は大丈夫か知ら、五體五足は如何だらう、イヤ一體二足でなくツちや困る。人生の第一歩に、幸あれ、ア、神よ。僕は勝手の板の間に蹲居んで、少し残ツて居た冷飯をかき込みながら最も眞面目に神の存在を認めた。元來僕の郷里の家は眞言宗だが、斯うした場合僕は心の底からクリスチャンのやうな氣になつて居た、子供が無事に産れますやうに、南無阿彌陀佛では如何考へても具合が悪い。

(六)

出掛けに壽斗を誂へて置いて、殆んど駆け足で停留場へ行ツた。電車へ乗ツて腰を卸すと、直ぐ發車ないのが積に障る。後からく乗る奴が愚圖々々して居やアがるからいかんだ。横ツ面でも一ツ食はして、正氣を入れてやりたいやうだ。妻が苦しんで居る態や、赤ン坊の出たところの姿や、可愛い顔や、目が潰れて居る顔や、足や手が生へ損ツた顔が、僕の頭裡の中でゴチャ／＼に入り亂れて、眩暈するやうに茫乎として仕舞う。電車の走るのが遅クツて、始終貧乏顫ひばかりして居た。顫ツて居れば幾等か氣がまぎれる。斯ういふ時に自動車に最大速度を出させて馳ツたら定めし氣持が好からうと思はれる。誰かゞ自動車に乗ツて人を二三人轢き殺して見たいといツたのを、非常に攻撃した人があツたが、僕は酔興でなく、二三十人轢き殺しても駛りたいやうだ。但し生れ落ちて今日まで、自動車に片足かけたこともないのだから、御心配は御無用に願ひたい。

二度電車を乗り替へて、目的の停留場で飛び下りるや否、大足の早足で大華堂へ行ツたが、生憎なもので主人は留守だと言ツて嬶が出て來た。チョツ！、今日留守とは尿忌々しい。

「困ツたなア、今日留守ぢや困ツたなア。」

「何か、御用事なら承ツて置きました……。」

「承ツて貰ツたんぢや足りない用なんです。困ツたなア。」

地團駄を踏みたくなツた。こんなにして居る間も氣が揉めて仕様がなないんだ。」

「前以ツて、おはがきかお電話をかけて頂きますれば、必ずお待ち受けいたしました。が、今日先生がお出でになることは、良人は知らないでございませう。」

僕の言ひ方と面つきが、癩に觸ツたらしい。しかし此方はそんな理窟を聞いてる場合ぢやないんだ。

「困ツたなア、實は、今日妻がお産の最中で、原稿料を貰ツて、行きたいんだが、困ツたなア。」

『あら、左様でございますか、そりやお芽出度うございますねエ』

『餘り芽出度もないが、仕方がない。……ちよつと歸らないでせうなア、行先は解らないのですか。』

『さア、何家へ行きましたか、言ひ置いて参りませんから一向解りませんが、それは先生もお困りでございませうねエ。どうせ差上げるお金があるのでございますから、何ならお持になつても關ひませんが、幾等ほどございましたらお間に合ふのでございますか。』

『さうですなア、矢張二十圓欲しいんですが、』

『左様でございますか、それでは、然ういふお急場の御入用でございましたら、私が計らつて置きますから、』

『有難う、さうして貰へりや助かる、斯してる間も、實は氣がぢやないんだ。』

お神さんが十圓紙幣を二枚、奥から出して來た。有難い、僕は吻としてすぐ表へ出た。これさへありや最う大丈夫、妻に十分手當をして、赤ん坊に着物の一枚も買つて

やつて、産婆さんに禮をして——さうだ、鯉節を一本買つて歸らなきやならないと思ひ付いて、電車に乗らないで鯉節屋を探しながら飛ぶやうな大足で、知らぬ間に廣小路まで來てしまつた。

街を左右に見ると、丁度筋向ふに一軒あつたから、早速飛び込で一本買つた。

『これにいたしますか、五十三錢。』

『ア、十圓紙幣で殘餘をくれ。』

五十錢でも六十錢でも平氣なもんだ。小さい錢はないんだとばかり、袂を探つて出さうとすると、サア失敗つた。無い、無い、二枚あつた筈の紙幣がない。胸がドキ／＼として目が眩みさうになつた。

『無い、お、おツことした、おツことした。』

右にも左にもない、サア大變なことをしちやつた。この急場に、なくてならぬ金を——不意に大きな物がチリと落ちかゝつて、身體が微塵になつたやうな氣がする。小僧の奴は包んだ鯉節を差し付けて、昵々と不思議さうな顔をして見て居る。

「ま、ちよつと待ッてくれ。」

表へ飛び出して、歩いた所をキヨロ／＼しながら走ッた。大變なことをした。もし無かつたら如何しやう。一文なしで産婦と赤ん坊を抱へて、如何なるだらう。

運命の神も餘りに酷い。やツと貰ッた大切な金を、落すとは……チエツ！、凝ツと握ッて居れば好かつた。失敗ッた。大變なことをした。このまゝ電車にぶツつかツて、運命の面當に死んでやうか——涙が出た。涙が目の縁まで出た。

無い、無い、最う絶望だ。どいつか拾ッてしまッたんだらう。ア、困ッた。なんといふ不運なことだらう、袂へ入れるのは今日ばかりではないのに、今日に限ッて落すとは何といふことだらう。

妻は定めし待ち切ッて居るだらう、赤ん坊が生れて、騒ぎをやッて居ることだらう。何となく赤ん坊の泣き聲が聞えるやうだ。このまゝ俺が歸らなかつたら……ア、困ッた。涙がサツと湧いて來た。泣き倒れたいやうになツて來た。

偶と見ると、交番があツたから取り敢へず駆け寄ッた。頭をベコリと屈めると同時

に、「僕は金を落したのですが……。」と、哀れな顔で巡查を見上げた。

「何所で？」

「何所か、それが解らんです。」

間拔けたことをいやがる。落した所が解ッて居りや心配はない。第一餘り落着き過ぎて居るのが氣に喰はぬ。

「何所から何所までの間で遺失したのだといふんだ。」

莫迦に堅くろしく、ギコチなく遺失とお出でなすつた。そんな物差で量るやうな押し問答して居る暇はないが、ひツかゝツたからには今更逃げ出す譯にはゆかぬ。

「この通りをズツと、廣小路の經節屋まで行ッて、出さうとして始めて氣が付いたんです。」

「フン、此方へ來い。」

交番へ這入ッたから蹤いて行くと、手帳を出して書き留めるのだ。

「暮口か、財布か。」

「裸です、何にも入れて居ないんです。」

「幾等だ。」

「二十圓です。」

「五圓紙幣か十圓紙幣か。」

「十圓紙幣です。」

「二枚だねえエ。」

「エ、。」

十圓紙幣で二十圓なら、二枚に定ッて居る。餘り克明過ぎて自裂たくならア、たゞちよツと、拾ッて届けた奴があるかないか聞けばよかつたのだ。

「誰か、拾ッた者はありませんでせうか。」

「ウム、此方へは届けたものはない。」

多分さうだとは思ッて居たが、いよく斷言せられると、失望落膽の極、悲しくなる。

「何故財布か褌口に入れて置かないのだ。金だけ落したのなら届けて出ないかも知れないぞ。」

いよく失望落膽だ。困ッたことを仕出來したものだ。これが本當の、こけてビツチャリ尿の上だ。幾等褌口に入れて置いたつて、届けない奴は届けッことはない。何所のど奴が拾ッたか知らぬが、今頃は定めし巧くやつたと思ッて、何か買つて食ッて居るかも知れない。

「一體、何所へ入れて置いたのだ。」

「袂です。」

「よく探して見ろ。」

「幾等探してもありません。」

兩方の袂を探しながら、偶と思ひ付いた。思ひ付いたく。急に活き返ッたやうに、胸が平らかになつて、吻とした。餘り種々な事を考へて居たから、ついうツかりしたのだが、今日は袴を穿いて居るから、帯に巻き込んで置いた筈だ。手早く探ッて見る

と、矢張りあつた。先刻大華堂の嬢がくれた十圓紙幣が二枚、まぎれもなくあつた。何だかきまりが悪くなつたが、嬉しい。

「へえ、ありましたよ。」

「あつた？」

「つい急いで居たもんですから……どうも有難うございました。」

頭を掻きながら思はずニツコリした。巡査は狐にばかされたやうな顔をして居る。申譯のないことで、赤面の至りだ。

「どうも有難うございました。」

「ウム。」

二三度頭を屈めて、大急ぎで鯉節屋へ引き返へした。一分一秒を争ふほどの急場に、とんだ閑潰しをしてしまつた。最う生たかも知れない。産婆さんと木村の嬢二人で、どんなことをして居るだらう。妻が定めし心配して居るだらう。

「オイ、先刻の鯉節をくれ給へ。」

「入来ツしやい。どれでございますか。」

「さア、どれだツたか解らないが、好いや〜どれでも好い、五六十錢のを一本くれ。」
 今度は先へ十圓紙幣を投げ出した。

「斯ういふ所では如何でございます。」

「どれでも好いよ。これで好いよ。早く残錢をくれ。」

又爪先でコツ〜貧乏頸ひをしなら、残錢を貰ふのが待ち遠いことだ。一圓紙幣でも五圓紙幣でも宜ささうなものなのに、態と紙幣を揃へて、やうやく持つて来た。

今度は前よりも容積が多くなつたが、最う先刻のに懲りて帯になぞ巻き附けない。鯉節を懐中へ振り込んで、紙幣はしつかり掌裡で握り締めて居た。

子供の時分に、よく前の家のお爺が「錢はじつと握つて居るものだ。さうすりや手の温か味で、金がふやけて多くなる。」といつて居たが、紙幣だから多くはなるまいが、落す憂は確にない。

(七)

最う十時ちよつと前だ。家を出てから二時間にもなるから、吃度産れて居るに相違ない。安々と満足な兒が産れて居れば好いが、妊娠した後でも、子供に病毒が感染するのかわらぬ、全く盲目の兒でも出来た日にや大變だ。

隣の所まで歸つて来た時、耳を峙て、なるべく聲音をさせぬやうにしたが、赤ん坊の聲はしない。はてな、まだか知ら、それとも出損つたのか知ら、以前心安い家で、後産が出なくなつて、大變な騒ぎをしたことがあつたが、もしそんな事にでもなつたのではあるまいか、胸がドキ／＼して、入學試験の成績を見に行く時より心細い。不安だ。入口まで歸つても、家へ入つても、赤ん坊の聲はしない。産婆さんと木村の神さんが何やらいつてる聲がするばかりだ。妻は盛んに意氣ンでるやうだが、まだ出ないらしい。三疊と四疊半の襖が建てきつてある。

「如何も濟ません、まだですか。」と僕は襖から覗いた。

「はア、お歸へりなさいませ。最う直ぐでございます。」
「あ、然うですか。」

直ぐと言はれてヒヤリとした。如何にも直ぐらしい情調が漲つて居る。歸つて一安心と思つたが、なか／＼安心して居られない。妻は満身の力をこめて、殆んど夢中で意氣ンで居る。凄まじい光景だ。

側に座つて見て居るのも心苦しいから、何か用はないかと、クルリと座敷の中を廻つて、机の上の物を弄つて見たが、そんなことをして居る場合ではない。

「お神さん、何か買つて来るものはありませんか知ら。」

子供を負つて妻の枕元へ座つて居る木村の嬪にいつた。妻の側へ行つて、苦しさをなを見て居るのは氣がひけて、なんとなく氣味が悪いし、凝と煙草も吸つて居られないから、何か要事をして、不安な心を紛らして居たいのだ。

「先程ねエ、油紙を買つて参りました。」

「あ、さうでしたか、濟みません、幾等ですか。」

「イエ、後で宜しいンですよ。」

「ぢやさうして貰ひませうかなア。」と、出しかけた紙幣をひッ込めて、一段聲を小さく「最う出るのですか。」と、探りを入れた。

「エ、。」

嬢は首肯いた。

「早く、何でも産れてさへくれりや好い。」

「氣が揉めるでせう。」

「何だか勝手が解らんですからナア。」

「男はミンなさうですよ、良人なンぞでも、三公が産まれた時、マゴノノして居るばかりで、何にも役に立たないンですよものねエ。」

なるほど然ういはれると思ひ出す。僕等が朝起きた時、木村が一人で慌て、赤ン坊が出来たのに湯がないといふ騒ぎで、俄か仕立てに鐵葉で竈の眞似を拵へたが、お釜をかけたらひッちやけて、大まごづきに麻胡ついて、結局隣の瓦斯で沸さして貰

ひ、僕の家からも鐵瓶へ一杯沸かして持つて行ッて、やうやく間に合せたことがある。

しかし他人の事は笑はれない。僕も慌て、まごくして、どうも役に立ちさうもないが、それが男の通り相場なら、甘んじて役に立たないといふ酷評を受けても好い。全く勝手は解らないし、凝と落着いても居られないから、いきほひ麻胡々々せざるを得ないのだ。

「鯉節は、買ッて來ましたか。」

「來ました。」

「それでは、米を一升量ッて、後でお産婆さんに上げるのですから。」

「解ッて居ます。」

米一升と鯉節一本やることは、最う三月も前から知ッて居る、貧乏してるだけに、遣る物は先から先へ心配して待ッて居るから、心得たもンた。

「ちよつと家へ歸ッて來ますから……直ぐ參ります。」

「さア、どうも済みませんでした。飛んだ御厄介をかけましたなア。」
 嬢は歸ッて行ッた。斯うなると一人でも餘計に居てくれる方が氣丈夫だが、無理に止める譯にも行かぬ。

机の前へ座ッて居ても、何もすることがないから、三疊の産室へ行ッて見やうかと、立つには立ッたが、なんだか悲痛しいやうな、悽いやうな、人生の謎を暴露して居るやうな氣がしたから、そのまゝ又座ッて、煙草をスバク吸ッた。

妻の呻吟く聲がますます烈しくなッた。産婆さんが何やら小聲で、しかも力のある聲で注意して居るやうだ。いよ／＼ますます／＼大事が迫ッたやうだ。胸が又ドキ／＼して、居ても立ッても居られないやうだ。逆も落着いて居られない。

と、フギヤアと一聲。

僕はピヨンと飛び上ッた。産れた／＼、サア産れた。三疊へ飛び込まふと思ッたが、刹那の光景を見るのが恐ろしかッたから、いきなり表へ飛び出して、勝手へ飛び込んだ。クル／＼轉回ッて柄杓を持つて見たが、何もすることがないから、すぐ投げ出し

て一ツ所をまたクルリと廻ッた。

「お芽出度うございます。お男兒でございますよ。」

産婆さんが大きな聲で、手柄さうに言ッたから。

「へエ、」といッて、建てつけの悪い境への障子を開けやうと力一杯ひッたくッた。
 「水を一杯下さいませ。」

「はい、何へ……………」

「茶碗でも洋碗でも何でも宜しい。」

慌てゝコップへ水を入れて、急いで持つて行ッた。何ともいへぬ嬉しさがこみ上げて来る。赤ン坊が出来たといふ嬉しさよりも、まづ無事に一段落がついたのが嬉しい。肩の重荷を下したとは正に此事だらう。

赤ン坊は盛んに襪襦の中なかで泣いて居る、いよ／＼嬉しい、何となく芽出度なッて来た。

「奥さんおくさんに上げて下さいませ。」

「はい。」

妻の枕元へ行ツた、妻は頭髪を薬で縛ツて、すツかり産婦の姿だ、苦しさに肩で息をしながら、枕の上で頭を左右に轉がして居る。氣の爲か、けツそり疲せたやうである。

「さア水を呑め。」

妻はガツ／＼して、息を切らしながら忽ち飲み干した。

「まア好かつた、これですツかり安心だ。」

「本統に軽いお産で、お芽出度うございました。それぢや、湯を頂きます。」

「はい。」

僕は勝手へ飛ンで行ツて、盥を下して湯を汲み込んだ、斯うなりや最う尻端折だ。そこへ木村のお神さんが駆け付けて來た。

「お出産になツたやうですねエ。」

「出産しましたよ。」

嬉しかつたからニツコリした。

「それやお芽出度うございました。お湯は、熱くはありませんか。」

「然うですなア、此まゝ持つてツて、お産婆さんに巧くやつて貰ひませう。」

湯のは入ツた盥を抱へて、三疊へ行ツた。産婆さんは襦袢の中から赤ン坊を出して、立派なお男兒でございますよ。」と、落着き拂ツて湯の中へ入れた。赤蛙を引き剥いだやうな、小さな人間だ。足も手も満足に、曲けたり延ばしたりして、フギヤ／＼と大きな聲で泣く、股の間に、矢張りあるわい。男だ、お男兒だ。

「男ですなア。」

僕は小さい生物を差し覗いた。頭の髪が舐め付けたやうで、頭は割合に大きい、小さい手、小さい足、顔が嫌やに赤くツて、鼻がチヨツボリと高い。耳もある、大丈夫だ、目を擧めて泣いて居る。猿の兒のやうだ。

「お召物を出して頂きます。」

「はい。」

「私が出しませう、何所にあるんです。」

側に居た木村の妻君が立った。脊中の子供がむづかるのに、よく面倒を見てくれる。『箆笥の、下から二番目にありますから』と妻が言ふと、妻君は蒲團を跨いで二番目の抽出から、白の着物を出した。好い家では皆白だといふので、態々拵へたのだから、これなら大威張りの筈だ。父は貧乏して居ても、子供には好い家の真似をさせるつもりだ。屹度大臣が大將にして見せる。

産婆さんは綺麗に赤ン坊を洗って、すっかりお襦袢をかって、着物を着せてくれた。そして靴から樂を出して、目へ差した。目はバチリと開いた。大丈夫だ、完全無缺だ。『色の白い、鼻の高い。なか／＼好男子だ。ほ／＼／＼。』

産婆さんが笑った。

『本統に好いお男兒ですネエ、随分頭髪が濃いこと。』

木村の妻君が感心する。

冗談ぢやない。面は眞赤で些とも白くはない。鼻も高くはない。やうやく存在が解

る位のものだ。頭髪だつて、柔らかさうな、長い舐めつけたやうな毛で、餘り感心されるほどではないが、矢張り親の身になりや嬉しい。今日からいよく僕が親になつたのだ。不思議なやうだ。

『額が広いから好いですよ。』

僕は容貌の如何よりも、聞きかぢりの骨相上から判断した。頭の天上が高いのは、羅漢相といつて好いのだが、稍や巾着頭だから此奴臆病者かも知れない。

『それぢや寢ねさせませうかねエ。』

『良人、蒲團は押入の右の方にありますよ。』

『あゝ。』

押入の右の方を開けて、白の敷布團と、妻の長襦袢で拵へた掛蒲團を出して、妻の枕元へ小さい寢床を拵へた。寒いと不可ないからネンネコをかけて、その上から掛蒲團をかけた。フギヤア／＼、なか／＼よく泣く、口を不格好に歪めて、乳房を探してフギヤア、フギヤアとやる。

産婆さんはやれ〜といったやうに、エプロンを取って勝手に手を洗って、やうやく任務を終了した。職業柄とは言ひながら、大抵な世話ではなかつたらう。

午飯を食べて行つて貰ひたいと言つたが、どうしてもお暇にするといふから、兼ねて準備の米一升と鯉節一本を進上した。日本アルプス探検でもあるまいに、妙な贈物があつたものだ、然しこれが規則だから仕方がない。つまり稻荷様に油揚げといったやうな工合で、産婆さんは生米と鯉節を嚙るのが好きなのだらう。

『まあお大事になさいませ。なるべく此一週間ばかりは動かないやうに、静かにお寝つて居て下さい、食物も粥汁かソツプか牛乳といったやうなものを召し食つてねエ。』
『はい、畏りました。どうも有難うございました。』

『産後は血を動かさしちや不可せんからねエ、決してお動きにならぬやうに………それでは又明日伺ひます。』

僕が一人だから、氣の毒だと思つたのだらう。午飯を食べないで歸つた。

赤ん坊は赤い顔を白い蒲團に埋めて、スヤ〜と寝入つて居る。妻もうとく〜して

居るらしい。

『寝たやうですなア。』

『疲れますからねエ、落膽して氣が弛むから、幾等でも寝られるものですよ。』

『僕だって眠い。』

『さうでせうとも。』

『昨夜は一目も寝ないんですからねエ。』

『オヤ、然うでしたか、そりや大變でしたねエ。一寝入したら宜しいでせう。』

『寝ないけれど、赤ん坊が起きると困るから』

『起きたら解りますよ。私が直ぐ参りますよ。』

『さうですか、それぢや一寝入させてもらをう、眠くつて仕様がない。』

夏蒲團を一枚ヒツ被つて、ゴロリと横になつた。其所へ隣りの嬬がやつて來やがつた。僕の留守にちよつと來たのださうだが、今頃來つて何にもなりやしない。却つて迷惑だ。

『お出産になつたのですねエ。お芽出度うございます。』

それでもお祝をいはれると、餘り悪い氣持はしない。此方は餘ッ程芽出度い積りで居るんだ。

『男ですか。』

と、木村の妻君に話しかけた。女のくせに、男ですかといふ奴もないもんだ。手前の家の餓鬼をほつちやんと自稱してゐるくせに。ほつちやんですといつて遣らうかと思つたが、木村の妻君が男ですといつたから、黙つて居た。嬪はソツと襖を開けて、木村の妻君と一緒に赤ン坊を見に行つて、暫らくして歸つた。

お産が軽く済んで、全く安心した。實に芽出度い。これからはウンと努力して、立派に育て上げなきやならぬが、考へて見りや大變なことだ。前途が大いに案じられて、眠いのに寢入られない。

二三十分横になつて居たが、如何も氣にかゝる。何だか氣忙しい。イツそ端書を買つて来て、郷里を始め親戚や知人へ通知して置かうと、直ぐ端書を買つて来た。

序に名前を附けて通知したいが、如何いふ名前が好らう。偉い人になるやうに、ちよつと拈つたのが附けてやりたいが、まゝよ。お午に生れたんだから、正午郎が好いかも知れない。正午郎、好い名前だ、少くとも法學博士は大丈夫だ、よし正午郎々々、これに定めてをかう。

(六)

翌日の朝、妻が便所へ行きたいといひ出した。便所へ行かれちや困る。お産婆さんは動いては不可ないといつたし。木村の妻君は『下風邪をひいたら大變ですよ。』と威嚇したから、絶対に不可ない。

『不可ない。其所でやるさ。』

『だつて、まだ便器が買つてないのでせう。買つて置かなきや不可ませんねエ、赤ン坊が居るとどうせ入用んですから。』

『さうか、ぢや兎に角今だけは、何かで間に合せるさ。』

僕は勝手へ行ツて、何か好い物はないかと思ツたが、眞逆バケツも不可シ、米かし桶は猶ほ不都合だし、これといふ物がない。男なら酒屋の徳利でも間に合ふが、女はさうは行かん、仕方がないから洗面を身代りに立てることにした。愚圖々々して居て出されちや後始末が大變だ。

『サア、此器へやれ。』

『まア、こんな物へしては後で使へなくなりますよ。』

『使へなくなつても好いさ。やれく。』

『なんだか勿體ないやうですわエ。』

『關はないよ。お櫃の蓋を間に合せる譯ちやあるまいし。嘔吐を吐くとき使ふことを思やア何でもない。』

『座りが悪いから、ひっくり返りさうですわ。』

『ひっくり返へしちや不可ないよ。よく氣をつけて……………巧く上へ乗ツて見ろ大丈夫か。』

『エ、。』

『何でも間に合せば間に合ふもんだ、金はこれから幾等でも入用だから、間に合ふいもはあるもので間に合すに限る。』

ところが困ツたことが出来た。翌日産婆さんが十時頃に来て、赤ン坊にお湯を使はして、手を洗ふのに差支へが起ツた。例の洗面器を寢床の後方に置いて居たら、黙ツて勝手へ持つて来たには驚いた。

『ヤア、そりや一寸不可ないんです。』

『へエ、如何してです。』

『イ、エ、ちよツと不可ないんです、困ツたなア。』

全く困ツた。何か洗面器の代用はないかと、グルリと四邊を見廻したが、これといふ物がない。仕方がないから側の鍋を出した。持ツ所が破れて、最う使へさうもない奴だから、關まうことはない。

『これでやツて下さい。』

「まアお鍋で。」

「關ひません、如何せ使へないんですから。」

自から水を入れて、産婆さんの前へ恭やしく出した。鍋でも釜でも、宜しく利用出来るものは利用すべしだ。後で磨き砂で好く洗へば好い、金の中まで産婆さんの手垢が泌み込む譯はない。たゞ困ったのは便器に利用した洗面器だ、此奴は如何に僕が構はぬと思つても、妻が小便を放つた奴を洗つて、顔を洗ふ勇氣は出ない。

しかし毎日かなり汚ないことをやツた。赤ん坊の黄色い奴が附いてる襦袢を、僕が一手に引受けて洗ふのは遣り切れない。男が洗濯するのは餘り見好い物でないが、襦袢に至つては其極なるものだ。毎朝この見悪い極を一時間ばかり演じて、御飯焚をする、赤ん坊の面倒を見る。大變だ。仕事も何にも出来ない。それで居て妻には刺身だとか鯛の煮附だとか食はさなきや乳が出ないといふから、金が要ること夥しい。

僅か赤ん坊一人のために、僕の一身が破滅に瀕して來た。これで前途へ寄れば樂になるといふのなら望があるが、いよく苦しい一方だといふのだから遣り切れない。

その内お七夜が來て、妻も起き直るやうになつた、それだけでも大變助かる。第一心持が違ふ、寢て居られると氣が鬱いで、心細くツて堪らない。

親戚や近所からくれた布が、妻の枕元へ大部澤山重ねられた。妻はそれを一々尺どつて、着物にするとかチャン／＼にするとか、毎日その心配だ。

「お宮参りの着物は、如何しませうねエ。」と、幾度もいふ。お宮参どころか、貰つたものゝお返へしが要るといふのに、それさへ些とも當はないのだ。早く仕事をしてと思ふが、何にもして居る暇がないのだから困ツた。

産婆さんのお禮だけは、包んで仕舞ツて置いたから、別條はなかつたが、小費は頗る心細い。それでもするだけのことはしなきやならぬから、赤豆を買ツて來て赤飯を炊いて、小鯛の焼物と、白味噌のお汁と、煮べを拵へて、赤ん坊のために食ひ初の儀式をやツた。

「サア／＼、それぢやお父さん食べさせてあけて下さいまし。」

今日は産婆さんも少し改ツて居る。お父さんとは恐入ツた。なんだか喋ぐツたいや

うな気がしたが、赤ん坊を抱き取つて膳に對つた。詰らない習慣だが、斯ういふことは悪い氣持のしない、ちよつと愉快なものである。つまり此愉快に眩覺されて、知らずくゝ一生を終るやうな結果になるのが世間一般の人間らしい。僕も矢張りそれになるのだらう、如何も仕方がない。

赤ん坊が無茶苦茶に可愛い、赤い顔の口を不格好に歪めるなど、可愛い。

「それを、ちよつと箸を附けて、舐めさせておやんなさいませ。」
産婆さんがいふ。妻は起き直つて笑ひながい見て居る。

「甜させさへすりや好いんですか。」

「エ、エ、ほんの眞似さへすりや宜しんです。」

「よし、さあ、赤の飯だよ。」

赤飯に箸を附けるやうな眞似をして、唇へちよつと觸らせると、箸の方へ口を歪めて来る。まるで蝸牛の角のやうに、障らなきや解らぬのだ。

「サア今度は味噌汁だ、よく味を覺えて置け、次のは鯛だ」と、順々に箸の先きへ附

けて、舐めさせる。まるで玩具だ。小供といふものは面白いもんだ。これで尿を放れなきや好いのだが、毎日襦袢を洗はられるのに閉口だ。お湯屋へ持つて行つて洗へない品物だから困る。

産婆さんは歸る時、なるべく子供は泣せるやうにしろといつた。泣いても直ぐ乳をやらぬで。泣けて置く方が運動になつて、非常に發育に影況するさうだ。

ところが、家の赤ん坊は餘り泣かない。始終グウグウ寝て居て、稀に泣くと妻が乳をやるから、どうも運動が不足しやしないかと思ふ。尤も側に居て泣かれると却つて僕の方が哀れで堪らなくなる。

「オイ、少し吞ましてやれ。」といふ。

「好いんですの、吞ましても……。」

「だいぶ泣いたから好いだらう。」

「些とも泣きしないぢやありませんか、あれツばかりでは駄目よ。」

「さうか、ぢや最少し打ち遣ツといて見ろ。」

赤坊は首を左右に振って、例の如く口を歪めて乳を探す。

「ソラ泣け、最少し泣かなきや乳にならんぞ。」

「随分泣かない兒ねエ。」

「お前に似て強情張に出来てるんだよ。頭でも一ツぶんなぐってやらうか。」

「まア、酷ひ。」

「本統に泣かないア、オイ泣けや、最少し泣いてくれ。」

唇へ指を押しつけたら、口を歪めてチュー／＼吸ひ出した。鹽ッぱいも甘いもまだ感じはないんだ。

「コリヤだいぶ泣かせるやうにしなきや不可ないぜ、泣かないのは要するに身體が弱いんだ。」

「嘘、男の兒は泣かないものよ。」

「泣かない者にしても、少し位は泣きさうなもんだ。オイ、本當に泣いてくれ。」
「抱いて御覽なさい。」

「抱きや猶ほ泣かないよ。」

暫く打ちやツて昵と見て居たら、クス／＼言ひ出した。

「サア泣くぞ、やツたり／＼。」

「ホ、／＼、／＼。」

毎日々々子供の事で大騒ぎだ、何にも出来きやしない。やうやく十日ばかりして妻が床を離れたから、いよく馬力をかけて稼がなければ、先月の拂ひが滅茶苦茶になつて居るし、お宮参りの時する筈のお返へしといふ奴がある、尤も郷里から祝の印として金を送ツてやるといふことだが、そんなものを當にして居られない。これからはますます貧乏するばかりなんだ。

一朝僕が病氣にでもなつたら、親子三人養育院と着老院へ手別けで御厄介にならないきやならぬかも知れぬ。今の内に出来るだけ奮闘努力して—と思ふが、矢張出来ない。妻が要事をして居る時には、僕が見て居てやらなきやならぬ。それに産婆さんが来なくなつてからは、夫婦がさりで湯を使はしてやらなきやならぬ、これが頗る大役だ。

勝手に寒いから座敷へ盥を入れて、禪がけで始める。それも馴れないことだから、どうも巧くゆかぬ。

『良人、抱いて居て下さいよ、妾洗ふから。』

と、妻は僕に抱せようとする。洗ふのが骨が知らんが、捕まへて居るのも骨だ。何しろ骨なしのやうにグニヤグニヤだから、烈しく持てば痛からうし、緩く持てば洩れ出しさうで、危くして仕様がなない。

一度なぞ、とうとう持つて居た手から洩らして、仰天様に盥の中へ泳がしてしまつた。此時ばかりは猛烈にフギヤアグニヤと泣いた。

『良人は何をほんやりしてるんです。』

『お前が餘り足の方を引張るからだよ。』

『オウ可哀想にく、何もそんなに、怖い物を持つてるやうにしなくつても好いちやありませんか。』

『何だか潰れさうで、痛いと不可ないからだよ。』

『少々位固く持つたつて、痛いことがあるもんですか。良人のやうな人にお湯へでも連れて行つて貰ふものなら、湯槽の中へ落して、飛んだことになるかも知れませぬわ』

『お前こそ、俺が執固攫んで居たら、足を引き抜くかも知れないよ。赤ん坊は別に垢が附いてる譯ぢやないから、ちよつと赤くなつてる所を洗つてさへやりや好いんだ』

『可哀想に、湯を呑みましたわ。』

『呑んだつて少しだ。』

『だつて喫驚するぢやありませんか。』

『なんだい、全然俺の爲にして居やアがる。』

『良人が悪いんですよ。ねエ坊や。』

そろ／＼子供と妥協して、親父を冷遇し出した。怪しからんことだ。女は子供が出来るやうな気が強くなる。丁度犬が産んだ時のやうなもので、犬兒に手でも觸はると、飼主にでも咬ひ付く、聊か厄介な危険物である。

斯ういふなかでも気が張つてる爲かかなり仕事をした。そして郷里から貰つた金で

貧乏世帯

滞つた先月の拂ひと、お宮詣りの赤飯をふかして、近所や親戚へ返禮した。

これで一まづ一段落ついた。けれど僕の貧乏世帯はこれからである。子供の爲には、俵を輓いても金を得なければならぬ。實に残念だが、人間はその日に迫る生計には動かされずには居られない。子供のためだから仕方がない。木でも草でも、實を結ぶと忽ち凋落して、種子のために朽ちて肥料となるのだ、人間も子供が出来ると、そろく朽れかゝって、子供の肥料にならなきやならぬのだ。僕は正に肥料になりかゝつたのだ、考へて見りや詰らない一生である。最う此上は、肥料になりつゝ、貧乏と戦ひつゝ、生きて行くべき意義を確實に捕へることが必要だ。

その肥料も、他人のために、つまり並んで生へた雑草のために吸ひ取られる場合が多いから遣り切れない。幸ひ隣りの婆さんはまだ死なゝい。お爺さんもヨタ／＼して居る。しかし此まゝで濟みさうにはない。何か又始つて来るだらう。

貧乏世帯 終

大正八年一月一日印刷
大正八年一月三日發行

貧乏世帯

定價金壹圓廿錢

不許複製

著者 三宅 昭
發行者 飯島 竹次 郎
印刷者 高橋 郁

發兌

東京市日本橋區數寄屋町三番地
電話本局六八四番振替東京四五五四

明文館書店

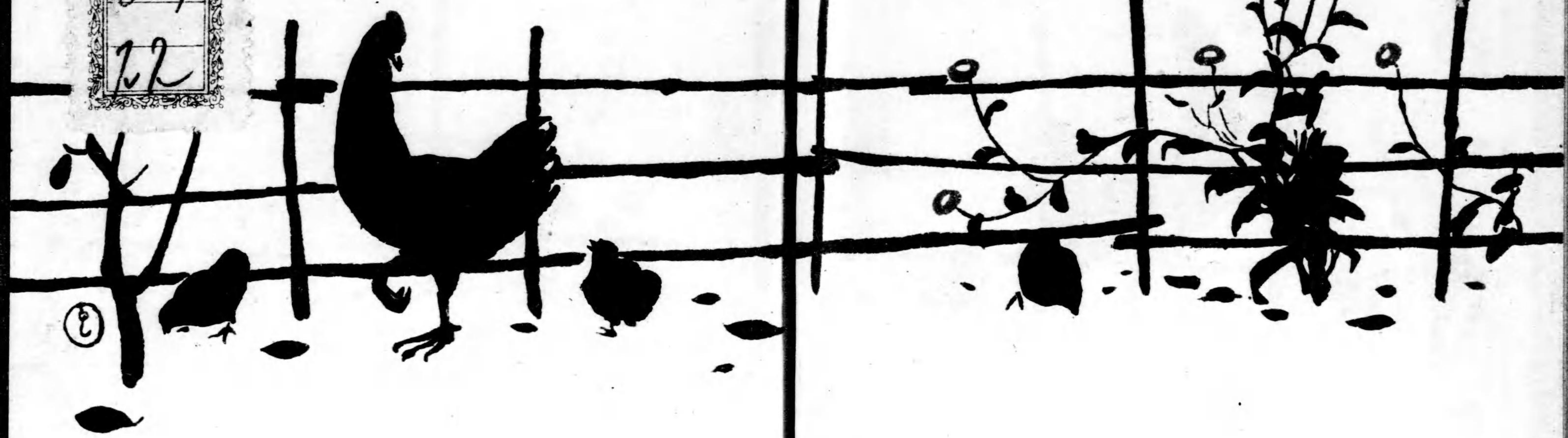
(社會式株刷印協三 所刷印)

村上浪六先生名著

人 の 垢	縮冊三五判金美本					人 生 の 旅 行		
	馬鹿野郎、稻田一作	日蓮と豊太閣	いたづらもの	稲田一野郎作	馬鹿野郎		豊太閣	日蓮
定價金	壹圓	合、金壹圓卅錢 本、金壹圓卅錢	定價金壹圓卅錢	定價金壹圓卅錢	定價金壹圓	定價金壹圓十錢	定價金壹圓	定價金壹圓
送料	八錢	送料八錢	送料八錢	送料八錢	送料八錢	送料八錢	送料八錢	送料八錢

好評噴々賣行飛如

251
22



終

